

6節 ラテンアメリカ

ラテンアメリカの世界

南アメリカ大陸を南米と呼んだ場合、北アメリカ大陸のアメリカ合衆国とカナダを北米、北アメリカ、その中間のメキシコからパナマまでの中央部を中米、中央アメリカと呼んでいる。そして、中米と南米、南アメリカを合せてラテンアメリカと称している。アメリカ合衆国とメキシコとの国境をリオ・グランデ川が流れている。この南側はラテン系の人々が中心の地域でラテンアメリカと呼ばれている。即ち、メキシコ以南の北アメリカ大陸、カリブ海全域、南アメリカ大陸全域の3地域と周辺部の島々である。この呼称は意外と新しく第2次世界大戦後である。公用語はブラジル、ベリーズやガイアナなど一部の国を除きスペイン語である。

17世紀、カリブ海域の砂糖ブームで、プランテーション農業の労働力としてアフリカから黒人奴隷が連れてこられた。先住民族のインディヘナ文化、植民地支配を行ったスペイン文化、奴隷として連れてこられたアフリカ系黒人文化が混じり合った。その象徴的なものにキューバのレンバにサルサといった魅力的な音楽、ラプラタ川河口のアルゼンチンやウルグアイのタンゴがある。また、キューバを中心とした中米の米料理、コングリなどの食文化に見られる。

中南米諸国の人種構成（％）

国	ムラト	先住民族	白人	黒人	その他
メキシコ	80以上	10	10以下		
ベリーズ	49	11	9以下	31	
グアテマラ	30	46			24
エルサルバドル	85	5	9		
ホンジュラス	90	7	1	2	
ニカラグア	69	5	17	9	
コスタリカ		1	94	3	
パナマ	60	10	10	14	
コロンビア	58	1	20	4	ムラト14 サボ 3
エクアドル	55	25	10	10	
ペルー	60	30	10		
ボリビア	32	55	13		
チリ	65	5	30		
ブラジル			55	6	ムラト38 アフリカ系1
パラグアイ	96.5	1.5	2		
ウルグアイ			90以上		黒人+ムラト2
アルゼンチン	ムラト+先住民族3		97		

ムラト：先住民族とヨーロッパ人との混血

ムラト：白人男性と黒人女性の混血

サボ：先住民族と黒人の混血

「ラテンアメリカを知る辞典」外務省「世界の国一覧」から作成

日本を真ん中にした世界地図では、東端に南北アメリカ大陸、西端にヨーロッパとアフリカ大陸が描かれている。これによると南北アメリカ大陸とヨーロッパとの距離関係を把握することは難しい。しかし、大西洋を中心の地図ではラテンアメリカはアフリカ大陸と向き合っており、ヨーロッパとの距離も思いの外近い。

20世紀末に多くの日本人が移民としてラテンアメリカに渡り、現在も日系人がブラジルやペルーなどに沢山住んでいる。これから日本がグローバルな視点で外交、政治経済を考える時、この地域をどの様に理解し行動していくのが試される地域ともいえる。

先住民族やメスチソの割合が多い国は、素朴な生活文化が色濃く残っており、総じて物価が安くラテンアメリカの旅先を選ぶ時の大きな要素の一つとなる。公用語はブラジル、ベリーズやガイアナなど一部の地域を除きスペイン語である。

① 中央アメリカの国々

中央アメリカは南北アメリカ大陸を結ぶ地峡に位置する地域で、メキシコのテワンテペック地峡からパナマ地峡の間を指す。広義にはメキシコ全土から西インド諸島を含む。具体的にはメキシコ、グアテマラ、ベリーズ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマと続き、太平洋と大西洋の双方にアクセス可能という地理的な条件から注目を集めている地域である。メキシコを除くと小規模国が密集するところで、世界経済から見るとそれほどの重要性はないが、二つの大陸と海洋を結ぶ交通の十字路である。

人種を見ると、コスタリカを除くと先住民族と白人との混血であるメスチソの割合が大きく、中央アメリカ全体で約60%を占め、白人はおよそ20%である。国別にみると、グアテマラは先住民族が最も多く約45%、コスタリカは白人が90%を越え、ベリーズは黒人が30%以上と特徴がある。

中央アメリカの国々は、独裁政権や内戦さらには薬物がらみのギャングの流入、前近代的な土地制度による貧困などによる政情不安、治安の悪化が共通の悩みである。そんなマイナスイメージながらも熱帯雨林、火山、サンゴ礁に海、歴史的な街並み、マヤ文明の遺跡などなど観光資源が散らばっている。90年代に入ると、エコツーリズム^{(*)1}さらにはカルチュラルツーリズム^{(*)2}に対応できる観光資源を備えており、貴重な外貨収入源として各国の経済を支える重要な役割を担いつつある。

メキシコのユカタン半島からグアテマラにかけて住んでいたマヤ族は、紀元前1,000年頃、大陸最古のマヤ文明を築き、チェチェンイツァーに残る独特の暦法や象形文字を持つ高度の文明が栄えていた。これより北のメキシコ高原に住むアステカ族が、15世紀前半アステカ帝国を築いていた。また、太陽神への信仰を中心にしたインカ帝国はアンデス一帯にインカ道で知られる高度な統一国家を築いていた。これら中南米に存在していた先住民族による王国、帝国は、1519年にスペイン人に滅ぼされた。コロンブスがアメリカ大陸に到着してからたった30~40年の間に、次々と破壊



され滅されてしまった。

(＊1) 自然、歴史、文化など地域固有の資源を生かした観光で、環境保全性と持続可能性を考慮するツアー

(＊2) それぞれの地域の生活や文化、民族、伝統などを求める文化観光。特にそこに住む人々に関心を向けることを
エスニックツーリズムと呼んでいる



中央アメリカを
結ぶ国際バス

メキシコ（メキシコ合衆国）

スペイン語のメキシコはメヒコである。メヒコは 15 世紀に現在のメキシコの地に栄えたアステカ王国の守護神ウィツィロポチトリの別名「メヒクトリ」に由来し、メヒクトリの地、「神に選ばれし地」を意味している。

メキシコは 1521 年スペインによって滅ぼされ、その後 300 年に渡って植民地となった。1810 年～1821 年クリオールヨ、スペイン人を親としてラテンアメリカ生まれの人々の後押しを得たメキシコ独立戦争を経て独立。その後も相次ぐ戦争に見舞われたが、1910～1917 年のメキシコ革命で新憲法を制定し、メキシコの基礎が確定した。それ以降クーデターはなく比較的安定している。

国土面積は日本の 5 倍、人口は 13086 万人（2024）で、スペイン語圏 21 カ国中最多である。地下資源にも恵まれ銀の埋蔵量は世界 2 位、銅は 3 位、鉛と亜鉛は 6 位、金は 11 位、他に希少金属も産出する。

国内にはアステカ王国をはじめとするミステリアスな遺跡など 34 カ所の世界遺産、カリビアンブルーの海と白いビーチのリゾート地、先住民族の料理を母体としてスペイン料理の影響を受けたカラフルなメキシコ料理、更には陽気なメキシカン気質も加わり観光資源に恵まれている。

<メキシコ料理>

メキシコは、日本の 5 倍の国土面積や多様な地理的環境から、多様な地域性に富み、地方色豊かな郷土料理が発達している。国民食はトウモロコシの粉からつくる薄いパンのトルティーヤで、これに酸味のあるピリ辛ソースのサルサが欠かせない。これを組み合わせたメキシコ料理の代表が「タコス」である。肉や野菜などの具材をトルティーヤに乗せ、さらにサルサをかけ、二つ折りにして挟

んだり巻いたりして食べる。具材は牛、豚、鶏肉などのひき肉やサイコロ状のもの、エビなどの魚介類、レタス、トマトやタマネギの野菜類、時にはアボガドなど果物やチーズと多岐に及ぶ。メキシコ人が愛してやまないタコスだが、一膳飯屋の目立つところに日本のカップラーメンが幅を利かせる程広く普及していたのに驚いた。

メキシコ料理イコール辛いイメージがあるが、これはサルサに入るトウガラシ、現地語のチレによるものである。トウガラシの原産地は、野生種が見つかっていないため断定できないが、メキシコ中部渓谷の紀元前 6,500～5,000 年前の遺跡からトウガラシが出土していることから発祥地の一つとされている。コショウを求めてアメリカ大陸に着いたコロンブスは、コショウに劣らぬ優れた香辛料のトウガラシにめぐり会いヨーロッパに持ち込んだ。これがアジアに伝わりマーボー豆腐、エビチリ、日本から朝鮮半島に伝わりキムチなどを生み出した。

余談だが、鶴岡市は 2000m に近い山から平野、海へと変化する地形が山の幸、海の幸を育み豊かな食文化を生み、世代を越えて受け継がれてきた枝豆、丸ナス、赤カブなどの在来作物が 50 種を越す。加えて、山岳修験道の聖地、出羽三山には生きるための精進料理が伝わっている。これらの食文化が世界から注目され 2014 年に鶴岡市が国内唯一「食文化創造都市」の認定を受けた。ところが、7000 年前からメキシコに伝わる地方色豊かな伝統食が評価され、日本より前にユネスコ食文化創造都市に登録されていることを知った。

和食の素材は新鮮、旬のものが大きな条件である。地産地消あるいは近在近郊からの食材調達が不可欠で、産直ブームとなって表れている。古来より「四方三里」とか「四方八里」と言われてきた。この四方三里の面積が庄内平野の広さとほぼ一致する。偶然とは言え興味深い。(1 里は約 4km、庄内平野は南北約 50 km、東西は南部で 16 km、北部で 6 km で平均 11 km)

＜カンクンとチチェンイツァ＞

ツアー会社の「ユカタンからコスタリカへ 20 泊 21 日」ツアー（'03）参加のため、開始 2 日前にカナダトロント経由でカンクン入りした。ダウンタウンからふらりと浜辺、いやビーチに来てみたが、色とりどりの水着姿の観光客が溢れ、青空にはパラセーリングが風を切っていた。これまで経験したことのない洗練された開放感と派手さ、それに相応しい美しさと広さに完全にビビってしまった。ここは政府指導で開発されたリゾート地で、年間 300 万人を越える観光客、セレブが集まる世界的知名度のビーチである。ツアーの発着地でなければ近寄ることのない所である。立ちすくんだ足元から続く白いサンゴ礁一帯はホテルゾーンで、白を基調としたホテル群に加えカジノ、ショッピングモールなどなどが林立しているのが望めた。すごすごとゲストハウス、ダイナーやレス



トラン、ツアーや格安航空券の看板を掲げる旅行業者の密集するダウントウンに戻って、明日のチチェンイツァへのツアーを申し込んだ。

チチェンイツァはカンクンから南へバスで2時間ほどの距離である。マヤ文明が最も栄えた 9～13 世紀頃の遺跡である。中心は英知の塊と言われるエルカスティーヨで、マヤの最高神ククルカン、翼をもったヘビの姿をした農耕神を祀るピラミットである。一辺が 56m の正方形をベースにした階段状で、高さが 24m のマヤの天文学を体現するため構築されたと言われている。四方にそれぞれ 91 段の階段、これに神殿に登る1段加えると 365 段で太陽暦の1年の日数になる。また、ピラミットの各面は9層の構造になっているが、各層は階段を境に 2 層に分かれており合計 18 層で、マヤ暦の1年 18 カ月を表わしている。



天文台（太陽や月の運行から正確な暦をつくった）

また、このピラミットで春分と秋分の日にククルカン降臨現象が見られるという。太陽が真西に傾くとピラミットの段による影と太陽の光により巨大なヘビが浮かび上がるという。全て計算し尽くされたうえで精密に造られていることから「新世界七不思議」に選出されている。

【参考】新世界七不思議（'07 発表）

万里の長城（中国）、ペトラ（ヨルダン）、コロッセオ（イタリア）、チチェンイツァ（メキシコ）、マチュピチュ（ペルー）、タージマハル（インド）、コルコバードのキリスト像（ブラジル）

他に「新世界七不思議自然」版、「新世界七不思議都市」版がある。

＜アステカ王国とカカオ＞

カカオはチョコレートの原料であり、栄養価の高い健康食品として知られている。カカオの正式学名は「デオブロマカカオ」で、ギリシャ語で「神の食べもの」を意味している。原産地はメキシコのユカタン半島、アマゾン川やベネズエラのオリノコ川流域の熱帯雨林とされており、先住民は有史以前からカカオを細かく砕いて作られる飲みものは上流社会の結婚式、薬草を混ぜて薬や疲労回復に用いていた。マヤ文明時代の 4～9 世紀頃にユカタン半島付近でマヤ族やアステカ族がカカオを栽培し、神に捧げるものとして儀式で使われ、時には貨幣代わりに使われていたという。

チョコレートの語源は、アステカ時代にアステカ人が飲んでたカカオの飲みもの「ショコアルト」に由来するという。先住民に代ってこの地を支配したスペイン人が、先住民の王族や貴族の飲みものとなっていたカカオをヨーロッパに持ち帰った。17 世紀にオランダでココアパウダーがつくられ、ココア飲料がヨーロッパで急速に広まった。18 世紀後半の産業革命の頃にチョコレートは

飲みものから食べるものに変化し、19 世紀にはイギリスの菓子職人によって固形チョコレートが作られたが、原料は全て南アメリカからの輸入であった。そして、1876年にスイスで今日のチョコレートの基本形ともいえるミルクチョコレートが出現した。言い換えれば、チョコレートはヨーロッパ人総力の結晶と言える。

カカオは中南米原産だが、スペイン人とフランス人によって西インド諸島で、イギリス人によってアフリカのギニア湾岸で栽培され始めた。これが発展して今日ではアフリカが主産地になっている。今日のカカオ生産は中米、南米北部、西アフリカ、東アフリカ、南アジア、東南アジア、オセアニアの約 50 カ国で生産している。カカオの生産量（2021 年）は、コートジボアール（39.4%）、ガーナ（14.7%）、インドネシア（13.0%）、ブラジルの順で、西アフリカが 70%を占める。

カカオは高温多湿の熱帯で、北緯 20 度から南緯 20 度のカカオベルトだが、高度が 30 から 300m、年間平均気温が約 27℃で、気温差が少ないところ、年間降水量が最低でも 1,000 mm以上とかなり限定された地域である。カカオの実、高さ 6 ないし 7mのカカオの樹にぶら下がるラグビーボール状に実る。実はカカオポットと呼ばれ、その中に種子のカカオ豆が 30～40 粒入っている。これらを取り出しバナナの葉などで覆い発酵させた後に乾燥してから加工国へと送られる。ここまでの作業は、高温多湿の条件下で現地の貧困層の労働力に頼っている。

チョコレートの年間生産量の多い国はドイツ、イタリア、イギリス、日本、ポーランド、ベルギー、フランス、スイスとヨーロッパが上位を占めている。なお、チョコレートの生産国は、酪農の盛んな国とほぼ一致している。



長さ 30 cm位のカカオポット

ベリーズ（ベリーズ）

ベリーズはマヤ語で「ぬかるみ」を意味するように、河川、ラグーンが分布し、国土の 65%が熱帯雨林で覆われている。中央アメリカ北東部、ユカタン半島の付け根の部分に位置し、独立前は「英領ホンジュラス」と呼ばれていた。1981 年に独立し英連邦に加盟しており、中南米では珍しい英語を公用語としている。住民はメスチソが 49%、17 世紀から 18 世紀にアフリカから奴隷として連れて来られた黒人が 31%、



キーカーカーのメイン桟橋

先住民族マヤ族が 11%、白人やその他が 10%である。

美しい海と珊瑚礁に恵まれ、オーストラリアのグレートバリアリーフに次ぐ延長 240km のバリアリーフが発達している。真珠を散りばめたように約 200 のキー、小島が点在し「カリブ海の宝石」と呼ばれている。

ヨーロッパ人に侵略される以前は、先住民族マヤ族の文化が栄え、その歴史は紀元前にさかのぼる。それらの遺跡は亜熱帯の森林に隠れるように内陸部のマヤ山地や高原にひっそりと眠っている。

＜キーカーカー＞

ベリーズシティから北東へボートタクシーで約 45 分、数あるキーの中でも最も美しいといわれるキーカーカーに向かった。メジャーな観光地でありながら、自然がそのままに残るこじんまりした素朴な島であった。



メインストリートでも舗装どころか砂のままで、ヤシの木に ” GO SLOW ” の看板が打ち付けられていたが、車はなくゴルフカートか自転車が代行していた。島の端から端までぶらぶら歩いても 1 時間はかからない。車がないと人の歩きもゆっくりとなり、優しい時間が支配するところだった。

翌日、シュノーケリングを楽しんだ。バリアリーフ中央にあるキー、小島に向かった。直径 20~25m で 360 度のオーシャンビュー。中央にヤシの木が茂り、キャンプランチの設備だけの島だった。島民の日常的な食べ物、焼いたロブスターをランチ代わりにした。島の高さは海面から 2~3 m だが、周囲はサンゴ礁で浅瀬になっており、波は殆ど消されてしまう。砂地を這うエイが近づいてきては餌をねだる長閑さだった。



グアテマラ（グアテマラ共和国）

国名の由来には、いろいろな説がある。その中で、先住民族の「森林の大地」を意味するグアテマヤンから転化説が有力とされている。首都周辺は樹木に覆われた丘陵地である。マヤ文明の発祥地で、各地に都市国家を築き、それぞれが独立した生活を送っていた。そのため遺跡にはいろんな様式が残っている。なかでもマヤ文明最大で最古の都市遺跡ティカルが有名である。

グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、コスタリカ、ニカラグアは、かつての「中央アメリ

カ諸州連合」を構成していたが、主義主張の対立から内戦、崩壊へと向かい、1839年に解体した。その後、1960年から1996年まで続いた内戦により、政治や治安面で未だに不安定な状態が続いている。面積は日本のおよそ1/3、北緯14度から18度で、亜熱帯の国である。首都グアテマラシティの標高が1,500mで「常春の地」と呼ばれるほど快適である。国民総生産の1/4がコーヒー、砂糖、バナナなどの農産物の輸出で2/3を占め、労働人口の半分が従事している。人口1840万人（2024）の52%が貧困層に属している。グアテマラ国民はマヤ系先住民族が46%、メスチソ30%と、国民の過半数がマヤ系の血を引いている。

＜国民食はトルティーヤとフリホーレス＞

グアテマラの神話に「人は神によりトウモロコシから創造された」とあるという。トウモロコシは古代からの主食であり、国民食であった。朝食は宿でシリアルやパンで済ませたが、中食と夕食は地元民が利用している一膳飯屋に出かけた。マサ、トウモロコシの粉に水を加えて練ってちぎって、手と指でパンパンと叩いて丸く薄くしたものを鉄板でほっくりと焼き上げたトルティーヤをニンニク、タマネギなどと一緒にインゲン豆を煮込んだ塩味の黒っぽいフリホーレスで食べた。

トルティーヤはメキシコのものより厚みがあった。焼き立てはトウモロコシの香が食欲をそそった。フリホーレスは店によって漉し餡状のものと粒餡状のものがあったが、この二つの組み合わせが最も一般的な食べものであった。レストランではスープ類や揚げ物を沢山見かけたが、好んで食べたのはトマトソース味の鶏肉をトウモロコシ粉に水とバターを加えた生地で包み、バナナの葉やトウモロコシの皮で包んで蒸したチュチートであった。一見、ちまきの様で軽食にあつらえ向きだったが、二つも食べると立派な食事になった。

＜アンティグアグアテマラ＞ — 古き良きグアテマラ

首都はグアテマラシティだが、ここから南西に24 kmに世界遺産に登録されているアンティグアがある。もともと首都であったが、1773年の地震で壊滅的な打撃を受けた。街の至る所に崩壊を免れた建物があり、あるものは今も現役であった。道路は全て石畳で、かつての植民地時代を偲ばせる雰囲気漂っていた。

街のシンボルは、道路を挟んで修道院と向かい側にある庭園とを結んだアーチの状の時計台であるアルコ通りである。ラメール教会側からアーチを見ると、街の背後にある富士山そ



っくりのアグア火山がアーチ内に収まった。富士山とほぼ同じ高さだが、大きさも高さも一回り小さく感じられるのはアンティグアの標高、1,520mにあった。

朝、散歩に出た。市の中心部に位置する中央公園は市民の憩いの場で、竹箒で掃除中であった。人魚の胸から水が噴き出す噴水を見ながら北に通り返けると、白壁造りの市庁舎に出た。陽光を浴びながら歴史が感じられる石畳の路を急ぐ学生たちの姿があった。所々に外国人向けスペイン語教室と長期滞在者向け部屋貸出の貼り紙が目についた。落ち着いた古都の雰囲気グアテマラに付きまとう治安の心配を忘れさせてくれた。

<グアテマラコーヒー>

中南米ではアジアで親しまれているチャ、ティーが姿を消し、コーヒーが幅を利かせている。グアテマラは、労働者の半分以上が農業に従事し、輸出の 2/3 を農産物が占める農業国である。代表的な農産物は言わずもがなグアテマラコーヒーである。その生産量は世界で 10 番目だが、中米を代表する生産国である。

世界のコーヒーは中南米、アフリカ、東南アジアのおよそ 70 カ国で生産されている。殆どが赤道を中心に南北回帰線間のコーヒーベルトに位置している。グアテマラコーヒーは、果物を思わずやや強い酸味と花のような芳ばしい香りが特徴で、上品なコーヒーだと言う。輸出先はアメリカ、カナダに次いで日本である。街のどこにでもカフェがあり、気軽に飲める値段で、茶請け(?) のケーキは、重量感があり、濃厚な味で結構美味だった。

ところで、コーヒーの熟した赤い実をコーヒーチェリーと呼んでいる。これらを天日で乾燥させるか、水で洗い外果皮と果肉を取り除くと種子、生豆が出てくる。その後いろいろな過程を経て焙煎へと進むが、取り除かれた外果皮と果肉の行方について述べられているものに触れることは殆どない。グアテマラで家族労働による水洗い精製、外果皮と果肉を取り除いているところを見せてもらった。生豆は大事に扱われていたが、取り除かれた外果皮と果肉は垂れ流し状態でかなりの匂いが立ち込めていた。垂れ流し先を尋ねたら、乾燥して肥料にとのことだったが、素直に信じがたい状態だった。

<グアテマラの布>

布に特別興味があるという訳ではないが、ザックで旅を続けていると布は求めやすい記念品となる。グアテマラの布は東南アジアのラオスと並んで稀にみる手織物の宝庫である。田舎に行けば行くほど変化に富み、美しく、優れたものが溢れていた。

首都のグアテマラシティの西 150 km、標高 1560m の高原にカルデラ湖がある。東西 14 km、南北 6~10 km の淡水湖である。周囲には形の良い 2,500~3,500m のトリマン山、サンペドロ山やアティトラン山など火山に囲まれている。この地を訪れたドイツの探検家で地理学者のアレキサンダー フォンフンボルトが「世界一美しい湖」と称賛したという。

湖畔にはマヤ文明の影響が色濃く残る先住民が 10 ばかりの村をつくって暮らしている。女性たちはウィンピルという貫頭衣とコルテと呼ばれる巻きスカートの民族衣装を身にまとっているが、村単位で独自の伝統模様、基調色、衣装の型を守り続けているのだという。そのため、男女を問わず着衣を見れば、どこの部族か判別できるという。例えば、湖畔の南で最も大きな村であるティアゴ

アティトランは白地にエンジのストライプ、湖東のサンアントニオパロポは青き衣の村だという。

織物に見られる典型的なモチーフは、太陽、月、四方位を表す十字、雨神など農業に関係深いものの、神話や伝説上の動植物、象徴的な幾何学文様など多種多様にわたっているという。色については装飾の枠を超え、宗教的な意味合いをこめられているという。その基本が四方位には神が宿り東は赤、西が黒、南は黄で北が白だという。

湖周辺で一番賑やかで観光の拠点がパナハッチルで、お土産屋さんには色とりどりの布はじめ手製の民芸品、お面などなど、ここで暮らす人々の温もりを感じられるものに溢れていた。湖畔の村々で見かけた女性は布を織り、男たちは畑で鎌を振るうという昔ながらの郷愁溢れる光景が「世界一美しい湖」にしている理由にも思えた。



湖畔で出会った村人



市場の母と娘



お土産屋のお面

<ティカル遺跡>

遺跡へは熱帯雨林を切り拓いた路であった。周囲の高木には手足の長いクモザルが行き来し、何処からともなくホエザルの声が聞こえてきた。

グアテマラは「マヤ文明」発祥地とされている。紀元前 12 世紀頃から人が住み始め、1 世紀に初代王朝が誕生したとされている。そして、今日のメキシコ、ホンジュラス、エルサルバドル、ベリーズの 5 カ国が熱帯雨林地域に誕生し、およそ 500 年に渡り繁栄した。なかでもティカルは紀元前 200 年から紀元 900 年頃に栄えた。最盛期には人口 6~7 万人で、政治経済の中心地の大都市であった。

古代マヤ文明は各地に都市国家を築いたが、それぞれが独立した生活を送っていたとされている。そのことは遺跡にも表れ、マヤ三大遺跡とされるティカル、コパン、キリグアーなど様々な建築様式となっている。ティカル遺跡は、大広場のグランプラザを中心に聳え建つ神殿群、支配者の住居であったアクロポリスなどからなるマヤ最大級の遺跡である。神殿すなわちピラミットが 6 つ、そのうち最もティカルを特徴づける形式をしているのが 1 号神殿、通称「ジャガー神殿」である。完全に修復され、細長い四角錐をした独特の形式である。この向いが 2 号神殿で、その間がグランプ

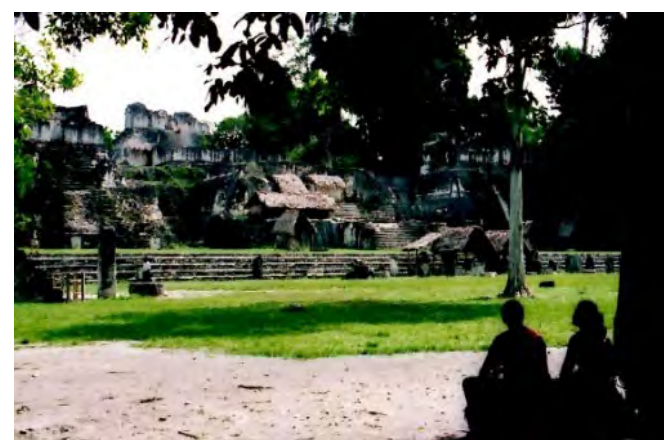
ラザであった。ここから西に向かうと3号、4号神殿であった。高さ65mで最も高い4号神殿に登るとジャングルの中から顔を出す1号、2号、3号神殿が望まれた。

マヤの神殿はピラミット状の台座の上に神殿が載っている。更にその上に華やかな装飾を施した屋根飾りがあった。4号神殿が完全な姿なら70mを越えていたのではといわれている。

マヤ文明は天文学や数学に支えられ高度な技術で築かれた都市であったが9世紀に突如として姿を消した。その理由は市民の反乱、疫病、自然災害などなどが考えられているが謎のままである。最も可能性の高いのが気候変動、自然災害説で猛烈な干ばつで都市機能を失ったのではと考えられている。



9層からなる1号神殿



大広場に面する住居址

エルサルバドル（エルサルバドル共和国）

エルサルバドルは「救世主」を意味する。1524年、この地を占領したスペインの将軍がキリスト教への感謝を込めて砦の名としたのが始まり。中米で唯一カリブ海に面していない国で、中米最小国である。民族構成は、85%がメスチソ、先住民族5%、白人9%。経済を支えているのがプランテーション農業で、コーヒー、砂糖、綿花などを栽培、輸出している。なかでも、コーヒーは輸出の半分以上を占め、労働人口の25%が関わっている。中央アメリカではパナマ、コスタリカにつぐ経済規模であるが、農産物を輸出しながら穀物を輸入に頼る前近代的な大地主制度が残っている。これ

に加えて、1979～1998 年の内戦により人口の 38%が貧困層と言われ、治安面など多くの社会問題を抱えている。

＜サンサルバドルの光景＞

グアテマラから陸路で入国した。50mそこそこの国境を越えた時の第一印象が、至る所にゴミが散乱していることだった。肩を寄せ合うような中央アメリカの国々は、気候も地形も歴史も似ていることから、似たような国々という先入観を持っていた。国境を境に、両国がこうも違うということは政治の大切さを物語っていた。



昼休みで寛ぐ市民



コンクリートで固められた戦車

サンサルバドルの中心部にあるロザリオ教会に出かけた。半円形の珍しいデザインだった。外観はコンクリートむき出しで極めて控え目だが内部は一変した。教会のイメージとは全てが違う。半円形の天井一面に様々なステンドグラスが施され、礼拝堂は七色に輝いていた。至る所にモダンな彫像が置かれ、壁や柱は美しい装飾で全体のバランスが取れていた。教会全体が一つの芸術作品で、他所では見られない独特な美しさがあった。内戦に懲りて放棄した武器を再利用して建立したことから「スクラップ教会」も呼ばれていた。

教会の隣、リベルター広場があった。周囲に戦車や銃などが剥き出しのコンクリートで固められ、平和を願う短い説明文が添えられていた。広場周りの屋台でエルサルバドルの国民食ププサを焼いていた。日本のお焼きのようなものでトウモロコシ粉の生地の中に豆のペースト、ひき肉やチーズを入れて丸く平たく伸ばして焼いたものだ。腰を下ろして昼休みを楽しむ人々がいた。日本



平和を願う説明文に広島の文字が読めた

とかく犯罪集団、治安の悪さが先行するサンサルバドルだが、笑顔で語る市民の表情を見ていると、治安を悪くしているのは一握りのギャングで、一般市民とは無縁に思えた。

【参考】 世界最悪の刑務所

エルサルバドルは、世界最悪の殺人発生率で知られる。国を二分するMS13とMARA18の対立するギャングによる30年近くの縄張り争いものである。2019年に政府がギャング撲滅作戦を掲げ、4万人収容のテロリスト監禁センター、CECOTを建設した。社会復帰を目指せないことを前提にして、外部との接触は一切禁止で、すし詰め状態の刑務所で知られている

＜サッカーで戦争?!＞

ラテンアメリカのサッカー人口は、日本人の想像を遥かに越える。体が動く限り誰でもプレーヤーであり、解説者でもあるほどサッカー文化が成熟している。また、サッカーのもつ意外性と創造性が他のスポーツと比べると際立っていることが人々を熱狂させるのだろう。しかし、時には暴動、殺人、戦争まで引き起こす異常なまでの行動は、単にサッカー熱にとどまらず、日頃鬱積した社会への不満が爆発するためと思われる。

サッカーで戦争とは信じがたいが1969年、エルサルバドルとホンジュラスの間で起こった。1970年のワールドカップメキシコ大会への出場権をかけた中米地区予選準決勝ラウンドがエルサルバドルとホンジュラスとの間で行われた。1回戦はホンジュラスの首都、テグシガルバで、エルサルバドルにとってはアウエーの試合だった。試合前日の夜、エルサルバドル選手の宿舎前は爆竹、クラクション、大声、宿舎への投石などなど一晩中大騒ぎで安眠妨害。これらの行為はラテンアメリカ常態的な行為だという。試合結果は1-0でホンジュラスが勝利。この敗戦で熱狂的なファンが自殺してしまう。この葬儀にエルサルバドル大統領はじめ政府要人、サッカー選手が参列しテレビ放映される国家的な行事になってしまった。

2回戦はエルサルバドルの首都、サンサルバドルでのホームゲーム。今度はホンジュラス選手の宿舎前で大騒ぎの報復攻撃。結果は3-0でエルサルバドルの勝利。試合終了後、街中で暴行、殺人に車への放火が繰り返された。また、ホンジュラス在住のエルサルバドル移民が襲われるなどで身の危険を感じエルサルバドル領内に避難するなどの混乱が生じた。戦争はその直後に始まった。エルサルバドルがホンジュラスとの外交断絶、翌日にはホンジュラスが国交断絶を宣言。そして、7/14に両国の空軍が相手国を攻撃し始めた。この戦争を「サッカー戦争」と呼んでいる。4日で終結したので「100時間戦争」、あるいは「エルサルバドル ホンジュラス戦争」、「1969年戦争」とも呼ばれ、2,000人の犠牲者を出した。

「サッカー戦争」と呼ばれているが、他の呼び方もされているところからも解るように戦争の背景には数々の要因があった。サッカーは単なるきっかけに過ぎなかった。両国の国境の多くが河川であったが、雨季と乾季で地形が変わることから不明確であった。人口密度の高いエルサルバドルからホンジュラスへ合法、非合法による多くの人々が移住したこと。更に、工業化の進んだエルサルバドルと農業に頼るホンジュラスとの間に貿易の不均衡への不満が燦々していたことなどなどである。この戦争で10万人以上の移住者がホンジュラスからエルサルバドルに戻され、国内の治安が乱れ、経済状態が悪化し、後の内戦へと繋がっていく。

【参考】1970年ワールドカップメキシコ大会出場権をかけた中米地区予選準決勝ラウンド3回戦は、6/27メキシコのメキシコシティで、それこそ厳戒態勢で行われ、3-0でエルサルバドルが決勝ヘコマを進めた

ホンジュラス（ホンジュラス共和国）

1502年、コロンブスがこの地に上陸するため船の錨を下ろした。しかし、海底まで届かなかったため、「オンドゥラ」（スペイン語で深さ、深み）と名付けたことに由来するという。ホンジュラス

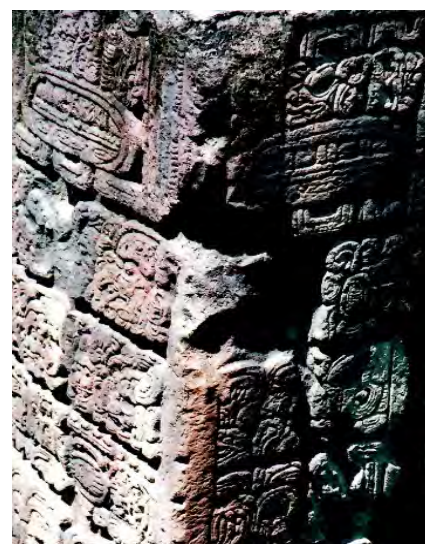
はニカラグアと共に中央アメリカで最も貧しい国で、国民の半数以上が貧困生活を強いられている。原因は、周辺諸国と国境紛争、内戦の勃発、独裁政などによる政治の不安定による。特に、2009 年軍事クーデターによる影響で失業者と貧困者が増加し、さらに麻薬組織による犯罪の増加もあり、治安は急激に悪化している。サッカー戦争の一つの要因であったエルサルバドルとの不明確な国境は、二度の国際司法裁判所の裁定によって確定した。

2012 年の人口 10 万人あたりの殺人発生率は 85.5 と世界最悪の数値を記録した。ホンジュラスはアメリカへの麻薬中間地点で、コロンビア産コカインの 80%は同国経由するといわれている。

民族構成はメスチソ 90%、先住民族が 7%、黒人が 2%、白人が 1%となっており、圧倒的にメスチソの多い。国土面積日本の 1/3 程だが、中米諸国ではメキシコ、ニカラグアに次いで 3 番目に広い。その 80%弱を占める山岳地帯、特に国土主要部の標高 1,000 m から 1,500m の高原地域では常春に近い気候になる。主産業はバナナ、コーヒー、サトウキビなどの栽培で、輸出総額の約 70%を占める農業国である。



貴族の住居址



ステラと呼ばれる石碑

<塀の高さ>

「その国の治安は、一軒家の塀の高さで解る」ともいわれている。日本の塀は隣家との境界線の意味合いが強く、隣人と会えば塀越しに言葉を交わせる。ホンジュラスは家屋より高く、中を伺い知ることは不可能である。刑務所の外壁を思わす高さで頑丈なコンクリートである。その上には忍び返しのガラスの破片を埋め込み、更に有刺鉄線がグルグルと渦巻いていた。玄関のドアは頑丈な鉄板で、複数の大きな鍵がかかっていた。塀のない家の窓は、全て頑丈な鉄柵で覆われていた。

投宿した三ツ星ホテルもコンクリートの塀に囲まれ、出入口は狭くオートロックの太い鉄格子の扉とドアであった。さらに、その前には完全武装のガードマンが 24 時間自動小銃を構えて警戒していた。ホテルは塀と鉄格子の中で、街とは完全に隔離されていた。

<コパン遺跡>

ホンジュラス西部、グアテマラ国境近くで、400 年頃から 800 年頃にかけて栄えたマヤ王朝の神殿遺跡がある。ビジターセンターに入ると、赤く塗られた遺跡の模型があった。他に沢山のパネ

ル、遺跡の概略や発掘調査の説明が添えられていた。遺跡内入ると赤黄青と如何にも熱帯を象徴するようなカラフルな大型オウムの出迎えてくれた。コパンは 1,000 人収容したグランプラザの大広場、王たちの彫刻とその業績を記したステラと呼ばれる石碑、マヤ王朝の歴史を刻んだ 2,200 の象形文字など全体的な美しさとその芸術的な価値からマヤ遺跡の中で最も美しいとされる。神殿が重なり合うアクロポリス、石柱や石碑が林立するグランプラザ、貴族の住居址とされるセプルトゥーラス、エル ボスケと呼ばれる住居址の 4 つの地区からなっていた。

遺跡内何処にいても繊細なマヤ文字、石碑に刻まれたジャガーや王の石像に溢れていた。なかでもアクロポリス地区の大広間から発見されたコパン暦は、現在の太陽暦とほとんど同じで、高い天文学的知識を持ち合わせていたことがうかがえるという。現在も調査、発掘さらには保全作業が続いているが、日本の「国際協力機構」JICA も大きく貢献しており、日本の碑も建てられていた。

1980 年、世界文化遺産に登録。治安が良いとは言えないホンジュラスだが、遺跡のあるコパンリナスは、危ない雰囲気はなかった。

<ロアタン島>

ホンジュラス本土から北に 65 km、カリブ海に浮かぶロアタン島は、コパン遺跡と並ぶホンジュラスを代表する観光地である。サンゴ礁が広がるカリブ海屈指のダイビングスポットとして、初めからリゾートアイランドとして開発が進められた島だという。とは言っても、宿泊施設以外は何もなく、絵にかいたような美しいビーチには小石もゴミもなく安心して裸足で歩けた。

島の人たちは黒人系のガリフナ族と呼ばれていた。スペインの奴隷船が難破し生き延びた黒人とカリブ族との混血だと言う。彼ら独自の文化が本土と違う雰囲気を醸し出しのんびりしていた。ウエストエンドに 3 泊し、シュノーケリングとカヤックを楽しんだ。楽しみにしていたジンバイザメとの対面はできなかったが、海中を羽ばたくように悠々と泳ぐウミガメと遊ぶことができた。



ニカラグア（ニカラグア共和国）

国名は、スペインの植民地当初、この地方に住んでいた酋長の名をとり「酋長ニカラオの国」に由来。中米のほぼ中央に位置し、国土面積は狭義の中米で最大だが、日本の北海道と九州を合せた位。民族構成は、メスチソ 69%、白人 17%、黒人 9%、先住民族 5%、その他となっている。

1821 年スペインの植民地から独立。1823～1838 年、中央アメリカ諸州連合を結成。崩壊後の独裁政治、革命と内戦による政治的混乱のため識字率や国民所得などが中米でも低水準にある。キューバ革命の影響を受け変革が進んでいるが、街角で警察官やガードマンが銃をもって警備している状況が日常的であり、治安は深刻な問題である。

労働人口の 40%以上が第一次産業に従事し、主要産業はコーヒー、バナナ、サトウキビ、葉巻などである。なかでも、葉巻とラム酒はキューバ産にも劣らない高級品として名声を博しているという。ニカラグアにはマヤ文明の遺跡はないが、代表的な観光地としてマナグア、グラナダ、オメテペ島、サンファンデルスールなどが挙げられ、近年エコツアーが盛んになりつつあると耳にした。

＜ニカラグア運河＞

ニカラグア南部に中米最大、中南米でチチカカ湖に次いで広いニカラグア湖がある。独立当初からこの湖、湖面標高 32mの淡水湖と東海岸のカリブ海、大西洋と、西海岸の太平洋を結ぶ全長 278 kmのニカラグア運河、パナマ運河の 3.5 倍の大運河建設構想があった。反米政権が支配しているニカラグア政府と中国が交渉し、中国系会社とニカラグアによる運河開発投資会社によって 2014/12 に着工式典を開催、4年後の 2019 年完成を目指していた。政府側も工事が生み出す雇用と経済効果を強調していた。



ところが、2018/2に運河建設中止の報道があり、4 月には本社事務所が閉鎖され、建設されないまま運河計画は事実上放棄され現在に至っている。その原因は、資金不足と地元民の反対にあるとみられている。

この運河の主導権を握っているのは中国で、完成すれば運河の運営権は 50 年間握り、さらに 50 年間の延長可能になっている。もし、完成すればアメリカ軍事戦略上極めて有利になることから注目されている未完の運河である。アメリカがキューバへの急接近の背景には、中国のラテンアメリカへの海洋進出に対する警戒感の表れとも言われている。

＜オメテペ島＞－ ひょっこりひょうたん島

ニカラグア湖に浮かぶオメテペ島へは、サン ホルヘからフェリーで所要時間は 1 時間弱だった。ニカラグア湖は琵琶湖の十数倍の大きさで、沖合に出るとそこはもう海と見間違えるほどだ。オメテペ島は淡水湖に浮かぶ島としては世界最大で、エコツーリズムの島として定着していた。

島の栈橋近くにオメテペ島のジオラマと観光案内図があった。島の形は二つの火山からなり「ひょっこりひょうたん島」のモデルかと思えるほどそっくりだった。

島民は馬を交通手段とする人、夕食の食材として釣り糸を垂れる人と、時間に縛られることなくゆっくりのんびりと自然を相手に過ごすところだった。島の売りは自然の外に何もなくて登山、サイクリング、カヤックなどなどあったが、時間の止まった手つかずの自然の中で過ごせる貴重な島だった。



コスタリカ（コスタリカ共和国）

スペイン語で「豊かな（Rica）海岸（Costa）」の意味。1502 年コロンブスが上陸した時、森林が果てしなく広がり、豊かだったことに由来する。地球上の全動植物の約 5%が生息する豊かな自然を有することから、国立公園と自然保護区の総面積は全国土の 1/4 を超える「環境保護先進国」として名高い。人種構成は白人 94%、黒人 3%、先住民族 1%、中国系（華人 1%、その他 1%）となっており、他の中米諸国とは異なり白人の割合が多い。

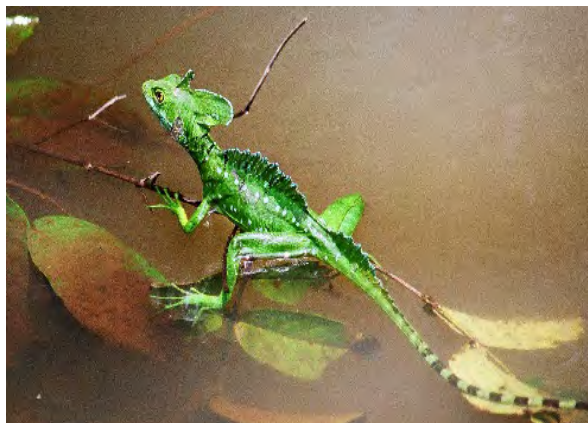
1949 年、「兵士より教師を！」をモットーに憲法で軍隊を放棄することを決定。以来、軍隊を保持していない。その代り約 8,000 人から成る警察が存在し、市民に対する一般的な警察サービス、治安維持、国境警備等の任務に当たっている。

コスタリカは中央アメリカでは例外的に政治的に安定し、コーヒーとバナナの輸出で経済成長が続いた。さらに、1960 年代以降外資導入による工業化が進み、現在では農業国から工業国となった。中米ではパナマの次に豊かな国となり、「中米の楽園」と呼ばれている。



熱帯林に張られたケーブルで滑車移動

2009 年、ニューヨークタイムズによる「幸福指数を基準にした調査」で 148 カ国中世界 1 位の幸福国に選出された。なお、2 位はデンマーク、日本は 75 位であった。しかし、1990 年代以降、南米産麻薬が欧米へ運ばれる際の中継地となっていることから、麻薬の一大消費地となってしまったという。それに伴って、治安の悪化と社会の不安定化が進み、治安の悪化が懸念されていた。その一方で、近年のエコツアーブームを反映しドイツを中心とする欧米からの観光客が増え、観光収入が増加している。エコツアー発祥の地だけに自然保護に力を入れていることは電力の 91% が自然エネルギーで占められていることからもうかがえる。



最も美しいトカゲ グリーンバシリスク

＜国立博物館と国立劇場＞

サンホセは、かつての宗主国スペインの雰囲気があるで感じられない中南米では珍しい首都であった。城砦のような旧陸軍本部は国立博物館に姿を変えていた。蝶が飛び交う温室を抜けると考古学や歴史の展示室があり、先住民族の暮らしから現代までの生活の移り変わりがまとまっていた。最も気になったのが中庭に転がっている「石の球」だった。最大のもので、直径 2.5 m 以上、重さ 24 t 以上だという。1930 年頃に発見された巨石球群^(*)は 200 個以上だという。造られた年代も目的も不明で、現代の技術をもってしても難しいとされる正確な球体から「世界七不思議」の 1 つされている。



(*) 巨石球、別名ディキスの石球は、鉄器をもたない先住民が石球を造った。「ディキスの石球のある先コロンブス期首長制集落群」として世界遺産に登録されている。

コスタリカ人に最も愛されている建物が国立劇場で、パリのオペラ座を模して造られたという。中米の各国はコーヒーの産地で知られるが、最も早く栽培を始めたのがコスタリカだった。1890 年にはコーヒーが輸出の 80% を占め、それで得たお金で建設したというから、当時のコーヒーマネーの凄さを感じさせられる。国立劇場は重厚感のある威風堂々とした建造物であった。入り口脇にはベートーベンの像が立っていた。内部は別世界だった。美しい金の装飾、シャンデリア、見事な彫刻などなどで溢れていた。コスタリカには大統領公邸がないので、国賓を迎える時にはここ国立劇場を使用することもあるという。



＜トルトゥゲーロ＞

コスタリカのエコツアーで人気なのが、カリブ海側に広がるトルトゥゲーロ国立公園である。ちなみにトルトゥゲーロとは「カメのいる場所」を意味する。この地の特徴は、密林の中に縦横無尽に水路が広がっていることだという。加えて、交通手段はボートのみで、原生林は人の手が入っていないので、鳥類、ワニやイグアナなどの爬虫類、ナマケモノやサル哺乳類などの生息地になっている。また、カリブ海側の海岸はウミガメの産卵地として知られている。

トルトゥゲーロの川辺の樹木には、イグアナが鈴なりで地上でも這いまわっていた。一般に灰褐色、グリーンが目立つが、中には橙色など暖色系も見られた。顎の後ろに瘤があるもの、たてがみにあごひげ、うろこ状の皮膚といい小型の怪獣に見えるが、性格は至って大人しいという。

夜の帳を待ってウミガメの産卵を見るため海岸に出かけた。出発前の注意事項はヘッドライトとカメラは厳禁、静かにすることだった。既に産卵が始まっていた。ピンポン玉のような卵が粘液に包まれて2個、3個とポロン、ポロンと砂地の穴に落ちる。生みの苦しみからか少し休んでまた2個、3個と続く。感動というか神秘的な光景に誰一人声を発するものは居ない。産卵を終えると尻尾で砂を移動させ産卵場所を覆い始めた。後ろ足を巧みに動かし砂を集めまた埋める。

。産卵でエネルギーを使い果たした後の最後の力を振り絞っての作業に見えた。カメが産卵場所を離れるのを確認すると、生命の生まれる瞬間の感動がみんなの口から洩れどっと話が弾



コスタリカの記念品

んだが、涙で潤んだようなカメの目が残像として残った。

カメの産卵は、一度に 100 個ほどを生むという。そして、大体 2 か月ほどで孵化して海へと向かうが、子亀のほとんどは海鳥や魚に捕食されてしまう。生存率は 1/5,000 とあった。パーセントにすると 0.02 %である。もし、このデーターが正しければ 50 匹の母亀が産卵してやっと 1 頭が生き延びる計算になる。この厳しい数字が、ウミガメ保護の根拠となっているのだろう。

翌日、川を下り、水路に入りながらのボートツアーに出た。水辺は大きな樹が水面に大きく張りだし茂っている。サギ類、クイナの仲間、ツーカーンなどの色とりどりの鳥類、ホエザルやクモザル、ナマケモノの親子と次から次へと現れる。水面を走るグリーンシバリスク、ボートを恐れることもなく静かに近づいてくるカイマンがいた。



<熱帯雲霧林>

コスタリカの面積は日本の九州と四国を合わせたほどで、北緯 8 度～11 度に位置している。緯度からすると熱帯であるが、国土の中央を背骨のように山脈が走っており、最高峰は 3,000m を超える。従って、熱帯から高山気候まで多種多様な自然の中に豊かな生態系が息づいていた。



中央盆地は標高 900～1,000m の常春の気候で、首都のサンホセはじめ主要都市が集中し、人口の 65% が住む中心地である。首都から車で北西へ 4～5 時間で熱帯雲霧林(*)に覆われたモンテベルデ自然保護区がある。太平洋からの多量の水蒸気を含んだ湿った空気が流れ込んでくるところで、標高が高くなるにつれて冷やされ霧や雲が常に発生している。

1,500～2,000m の熱帯雲霧林は、雲の中に入ったように霧が辺りを包み込み幻想的であった。木々は着生植物がびっしりまとわりついており、1 本の木を根から樹冠まで確認することは不可能である。これらの木々が霧の中に浮かび上がる姿は幻想的でした。熱帯雨林では 1 本の木に何十もの着生植物が付くのは珍しくないが、ここではその数は比較にならないほど多く、200～300 種類の着生植物が見られるという。陽光が射し込んでくるとありとあらゆる植物が、一斉に光に向かって動き出すような錯覚にとらわれた。

様々な植物が密生し、大きな樹木は苔に覆われ、その苔から他の植物が芽を吹き、花を咲かせてい

た。特に、世界のランの 10%の 1300 種以上が自生しているというから植物の宝庫である。

また、ここには世界で最も美しいといわれる鳥ケツァール、手塚治氏の「火の鳥」のモデルになった鳥が住んでいる。嘴の大きなキツツキの仲間ツーカーン、1 秒間に 60 回も羽ばたくというハチドリなど鳥類だけでも 830 種、ユーモラスな動きのナマケモノなど哺乳類が 220 種、世界で最も美しいトカゲと言われるグリーンパシリスクなどの両生類 150 種、原色の色鮮やかな昆虫に至っては 366,000 種というから生き物天国である。

なお、スピルバーグ監督による「ジュラシックパーク」、恐竜たちによる騒動を描いた映画の構想を練った気候区でも知られている。恐竜は確かに地球上に存在していた動物だが、どっか想像上のような気がしないでもなかったが、幻想的な自然の中に身を置くといつ、どこから恐竜が出てきてもおかしくないような雰囲気であった。



コスタリカの記念品 ツーカーン

（＊）熱帯雲霧林 熱帯や亜熱帯地域の山地で霧や雲が多く、湿度の高いに発達する常緑樹林。広い意味での多雨林

＜サンホセ本料理店＞

サンホセの最終日、街の裏通りで日の丸のマークの下に「日式レストラン」の看板が目に入った。日本の裏側に等しい中米で出される日本食に興味があった。店には客は居なかった。日本人と思しき 50 代半ばの女性からたどたどしい日本語で意外な言葉をかけられた。ここは韓国料理の店だという。日本人が欧米人顔から国籍を判別するのが難しい。欧米人には日本人も韓国人も中国人も同じに見えるらしい。中米では食べ物でも識別できないほど、アジアは遠く、馴染みの薄い国々なのだろう。

日本料理は季節感があり、健康的で、美味しく、見た目も美しいと、世界から注目されている。寿司は全世界で、アジアとアメリカではラーメン、ヨーロッパではカレーライスが人気を集めている。日本食がブームだといっても、オーストラリア シドニーで見かけた看板に「自家製 玉露入り豆腐 アイスクリーム」とあった。日本の常識を超えた「日本の食べもの」が出回っているのかも知れない。

パナマ（パナマ共和国）

パナマは先住民、クナ族の言葉で「魚の豊富なところ」、または「漁師」の意味を持つ。16 世紀初頭、スペイン人が上陸した時は小さな漁村に過ぎなかった。1903 年アメリカの支援のもとコロンビアから分離独立した。住民はメスチソ 60%、黒人 14%、ヨーロッパ系パナマ人 10%、先住民 10%、その他が 1%である。

パナマは南北アメリカ大陸の接点である。そして運河は太平洋と大西洋を結んでいるので、地形的にも文明的にも「十字路」である。それを裏付けるように商船保有が世界一であり、ラテンアメリカの金融センターとして世界の銀行が林立し、貿易中継地として世界取引の一大拠点としての地位

を確立している。中南米では珍しく就労者の約 60%、国内総生産（GDP）の約 80%がサービス業で占めている。

反面、第三次産業が盛んな首都圏と第一次産業に頼らざるを得ない地方との経済格差に加えて、富の配分がブラジルと並んで最も不公平な国で知られ、国民の 3 割は貧困層で、その半数は極貧に属する。旧市街地のスラム化した建物、強盗が出没するといわれるアンコンの丘や中米一治安が悪いといわれるコロンのバスターミナルに現れている。

2003 年、ツーカン社の中央アメリカの旅は、メキシコ集合、コスタリカ解散の 7 カ国で、何故かパナマが含まれていなかった。コスタリカからの入国を考えたが、かつてアステカ、インカ帝国などの金銀財宝を集めヨーロッパへと運び出した港が残り、政府から自治権を勝ち取り、独自の風俗習慣を頑なに守り通している原住民クナ族のサン プラス諸島があり、目玉のパナマ運河と奥深さを知り、仕切り直しでの入国を決めた。チャンスは 1 年後に巡ってきた。高原の国ボリビアと山、セルバ、そしてガラパゴス諸島と変化に富んだエクアドルの旅の後に入国した。

<パナマ運河>

パナマは、東西 600 km、南北 190 km で、最も狭い所は 50 km の細長い地峡国である。国のほぼ中央を背骨のように山脈が走り、これと直角に運河が造られている。パナマ入りした翌日、ミラフローレスロックに向かった。運河に近づくと、大型船が地上より遙か上、見上げるところをゆっくりと動いていた。スチールの扉で区切られた狭い水路一杯一杯の船舶が 10m も上下する光景は壮観を通り越して驚きであった。水の持つ不思議な力に驚異を覚えた。そして、考えついた人間の知恵に恐ろしさを感じた。20 年程前に訪ねた水路式のスエズ運河とは大違いだった。

運河庁、ACP のビジターセンターには、スペイン語、英語パンフレットの他に日本語版が用意されており、運河の構造が解り易く記されていた。運河中央に海拔高度 26m の人造湖、ガトゥン湖があり、その両側に 3 組の水門を造り、一方で船舶を持ち上げ大陸分水嶺を横断した後パナマ地峡の反対側で船舶を下降させる仕組みである。

運河建設の動きは、1534 年スペイン人チャールス 5 世による運河案の調査命令とされている。しかし、実際に建設の槌音が響き渡るのは 3 世紀も後になってからだった。すなわち、スエズ運河開通の勢いで乗り込んできた、フランス人レセブスによる水路式運河工事である。1880 年から始まったが、工事難と資金難に加えマラリアと黄熱病により 3 万人が死亡し 1889 年に中



断してしまう。その後、運河建設計画を持つアメリカの後押しを得て 1903 年、パナマはコロンビ

アから独立する。

同年から建設がはじまるが、カリブ海の島々から多くの黒人が労働力として入国している。ピーク時の労働者 43,000 人のうち 3/4 を占めたという。彼等の労働力なくして運河建設の成功はなかったとさえ言われ、運河の底辺を支えた功労者といえる。彼等の恵まれない環境、差別待遇の様子などを伝える小さな「アフロアンティジャーノ博物館」が旧市街地のガンジー広場近くにあった。

1914 年、10 年の歳月を費やして閘門（水門）式運河が完成する。しかし、運河建設前にパナマとアメリカの「運河条約」に、運河地帯の永久租借が含まれていた。運河地帯の幅 8 km は、パナマの領土でありながら主権の及ばないアメリカの施政権下になっていたのである。その後、パナマ国民感情の高まりや国際情勢の変化などなどから、1999/12/31、24 時に運河の運営、維持管理などの一切がパナマに引き渡され、「パナマ運河庁」が引継いでいる。

パナマ運河の全長は 81 km。通過できる船舶の最大サイズ、パナママックスサイズは船幅 49m、船長 366m、水深 15.2m。年間通過船舶数は 13,185 隻（'02）であった。

<運河クルージング>

バルボア港出航 7:00 で、コロソまでの所要時間 9~10 時間である。船は最初、運河と逆方向に進み、アメリカンハイウェイの一部アメリカ橋を過ぎたところで方向転換した。ミラフローレスロックに近づくと鋼鉄の扉がゆっくりと開いた。途端に説明は早口になり、ロックに入ると競馬中継を思わせるような口調となった。プール状になったロック内はコンクリートの狭く高い壁だった。

扉が締まると下から勢いよく水が入り込んできた。船は瞬間に浮き上がり、視界が開けてきた。3つのロックで 26m 日から 1 ロックで 9m 前後上下動することになる。水の移動は、昔々、理科で習ったパスカルの原理によるものだった。ロック上部には、分厚い木材が打ち付けられていたが、何処も大きく傷つきささくれたっていた。

ミラフローレスとペドロミゲルロックを過ぎてゲイラードカット、即ち掘割水路に入った。ちょうど大陸分水嶺にあたる所で、その距離はガンボアまでの 12.6 km、運河全体の 15 % だという。拡幅工事も進められ直線部分の 192m、曲線部分 222 m となり、船幅の広い船舶の対面航行でも安全面が確保されているという。湖底から掘り出された岩石、土砂は天文学的な数量に達するのだろう。

船上から見上げる人為的に削られた頁岩の壁が聳えていた。行き来する船舶がちっぽけに見える。間もなく船舶は広大なガトゥン湖に入った。もともと陸地だった平原の部分に河川の水を流し込んで蓄えた人造湖であり、運河の大半を占めている。言い換えれば、この人造湖の両端、つまり太平洋と大西洋側をコンクリートで固めた狭い水路で押さえ込み、大型船が通れるように水位を保っている。そして、ロック内で船舶を上下させる水はこの湖の真水であり、下流ロックで利用された後は海洋に流されるという。ロック内で船舶を一回持ち上げるのに必要な水はおよそ 2 億 ℓ、1 日の通過船舶が平均 37 隻というから、想像を越える水が使用されていることになる。また、運河には 40 組



のスチール製の扉があり、全て運河建設当初からのものだという。ミラフローレスロック入口、太平洋の扉が最も大きく高さ 25m で、潮の干満の大きさからはじき出された数値だという。

パナマ運河は、「南北アメリカ大陸を結ぶ地峡の最も狭い部分をぶち抜いて太平洋と大西洋を結んで大型船も通れるようにしたもの」といった単純なものではなかった。熱帯の降水量、ダム貯水量、潮の干満の大きさ、水の特性などなど当然のことながら計算し尽くされた上での一大土木工事だった。

ガトゥンロックは暗闇に煌々と浮かんでいた。3 つのロックでカリブ海、リモン湾の水面に出た時、乗客の拍手が船内に響き渡った。クリストバル港は大雨だった。下船したところにチップ箱がぽつんと置かれていた。

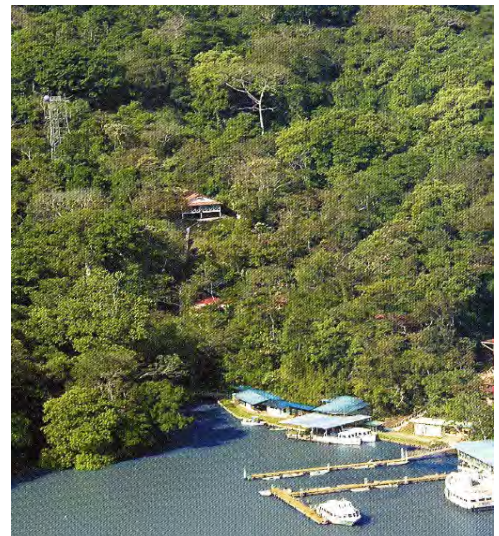


<世界の生物学者憧れの的、バロ コロラド>

熱帯生物の研究が世界で最も進んでおり、研究者の憧れの的になっているのが「スミソニアン熱帯研究所」だと聞いた。研究所は、パナマ運河の中央部を占めるガトゥン湖に浮かぶ最大の島、バロ コロラドにある。運河の生命線とも言えるロックで使用する水瓶となっている湖である。元々熱帯雨林の高みだったところが、周りに水が溜まって湖になったために、動植物が凝縮されて島に取り残されてしまった。1,316 種の植物、381 種の鳥類、102 種の哺乳類など、世界一多様な生態系の島になり、自然保護地域となっている。

市内の業者を通して研究所見学を申し込んだ。バロ コロラド行きボートの発着地、チャグレ川河口ガンボアの桟橋に向った。すでに 10 名近い人々がボートを待っていた。一足遅れで到着した二十代後半の女性から、周囲の沈黙を打ち破る爽やかな挨拶が飛んできた。彼女は今日のガイドで、オーストリア人だった。屋根付ボートからみる、運河に浮かぶ島もその背後の大陸もこんもりした熱帯雨林に覆われ区別がつかない。40 分の運河クルージングの後、研究所に上陸した。

そっちこっちに建物がある割には静かで、人影もまばらだった。冷房の効いた会議室でビデオとパネルを使って島の概要を説明から始まった。幾つもあるルートの中から、樹齢 500 年を越す大樹までのコースを選び、ゴム長靴に履き替え歩き出した。



曇り気味の天候のせいか、動物が活発に動いているようだ。遠方からホエザルの声が響いてくる。ブッシュではネズミやリスの仲間のアグーチが餌を漁っていた。ガイドが歩を止めると、先にはサギのような鳥や、黒いサルがいた。茶褐色のハキリアリ、葉切蟻が所々で見られた。列をなして身の丈以上の切り葉をせっせと地下の巣へ運ぶ様は健気に見える。アリは葉を餌にするのではなく、菌類を植え付け、アリタケを育てて餌にしているのだという。言葉を換えれば、アリがキノコを栽培しているのだ。栄養の尽きた葉はゴミとして巣から出され円錐形の小山になっていたが、ゆくゆくは栄養価の高い土壌に変化するのだという。

所々の植物に色分けされたテープとナンバーが付けられていた。どんな研究かは見当もつかないが、一昨年クスコから入ったアマゾン川支流沿いの市場で買い求めた樹液の虫刺され用塗り薬を思い出した。黒ずんだ液体だったが良く効いた。ひょっとすると、突如として暴れたすウイルスの特効薬が生まれるのかなとも思ってみた。

植物の説明の中で、「自殺木」という樹木が気になった。ニョキニョキと生い茂る木々の中で一際高く白っぽい樹木で、その根元に 1m 程の若木が数本必ず茂っていた。高温多湿の環境では、どんな植物も短期間で大きく成長するものと思っていたが、この若木は 10 年近くたっても殆ど成長しないという。大きな親木が倒れ、空を開けてくれるのを何年でも待っているのだという。

目的としてきた大樹が近づいた時、平べったい大きな根の張った巨木があった。太い幹に黒い点々が見えた。よく見ると 30 匹ほどのコウモリの集団が、上下 2 ヶ所に逆さ吊りになっていた。

この島には鍾乳洞等の暗所はないのだろうか。鬱蒼とした木々に陽射が遮られているが、湿度が高く汗が肌を伝って流れ、綿布のザックは硬くなっていた。研究所への帰り路、ナンバープレートの付いた立木の前で地面を掘ったり、葉をひっくり返したりしている 3 人の女性研究者に出会った。みんな若くはつらつとしていた。



研究所内のレストランで昼食をいただいた。世界中から年間 200 人の動物、植物の研究者を受け入れているというが、1 年以上も前から申請しないと上陸できない島だという。食事中の 30 人近い人々を見ると、20 代後半から 40 代までだろうか。女性研究者の姿が目立つ。一般にも公開されているが 1 日 10 人まで制限されていた。

プライベートな財団が基礎研究に多額の資金をつぎ込み世界に開放するあたりはさすが大国アメリカ力である。反面、運河を下心にパナマの独立を後押ししたり、運河地帯の永久租借権を得たり、そこへ軍事基地をつくるなどなどを考えると大国のエゴの一面も見えてくる。

午後のエクスカーションに出る前、スコールの襲来があった。視界を遮る雨脚に氣勢が削がれ、午後は研究所内の見学に変更した。高台に展示室があり研究についての様々な写真やパネルが展示されていた。小さな記念品の売店までも併設されており、象牙ヤシで作ったボタンを 2 組求めた。3 時間は瞬く間に過ぎた。15 時過ぎ、ガイド共々雨のバロ コロラド島を後にした。

＜カリブ海の要塞都市＞ ポルトベロとサン ロレンソ

中部アンデスを中心に栄えたインカ帝国を滅亡に追いやったスペイン人たちは、今日のパナマを拠点にして植民地を拡大していった。その速さには目を見張るものがある。コロンブスの第 1 回航海からわずか 50 年で、アステカ王国（1519）、インカ帝国（1535）を滅ぼし、南米の南端、フェゴ島まで達している。そして、蛮行の限りを尽して略奪した金銀財宝はパナマに集められ、船積みされ本国へと送られた。当時のパナマは一大港湾ターミナルであった。この港こそが、スペイン語で「美しい港」の意味をもつ「ポルトベロ」である。パナマシティの北東約 100 km、カリブ海側のコロンから東へ約 50 kmにある小さな港である。1502 年、コロンブスが 4 回目の航海で立ち寄り、名付けたとされている。

パナマシティから運河に沿って走る列車でコロンに向かった。コロン駅近くのバスターミナルはゴミ、ゴミで薄汚れていた。切符売場は檻の中だった（下左写真）が機能していなかった。食堂の外側は鉄格子に囲まれ、



厨房がまた鉄格子の中であつた。客席は鉄格子と鉄格子の間（下右）だった。トイレの場所は臭いで解った。中米 1 治安が悪いということは世界 1 ということだ。目付きが悪い人がうろろしている訳ではないが、何故か落ち着かなかった。



ポルトベロ行きのバスがコロンを離れるにつれ、田舎の風景に変わりほっとした。うとうとし始める頃、道路脇に石造りの要塞跡、砲台、砲門が見えてきた。ポルトベロは、1597 年地形的に防御の容易さから要塞の建設が始まり、スペインの中米拠点となった。中南米各地で略奪した金銀財宝をパナマ ビエホ、今日のパナマシティに一旦集めた後、パナマ地峡を横断しポルトベロの要塞に集積され、スペイン本国に向け積み出されていった。同時に、本国から運び込まれた物資や食料を貯蔵し、新大陸へ旅立つ人々の中継基地でもあった。

要塞化は湾の入口から進められ、南北 2 ヶ所で入口を固め、湾内 2 ヶ所に要塞を建設し、第 2 の防衛布陣を敷いた。仕上げは街と一体化した要塞で計 5 層構造の要塞都市が出来上がった。更に南西 60 km先のサンロレンソにも築かれ、難攻不落と思われた。しかし、1666 年にイギリスの海賊、ヘンリー



モーガンの襲撃で壊滅的な打撃を受け、1739 年イギリス提督エドワード ヴァーノンの軍艦の

攻撃で破壊されてしまう。5 層構造の要塞のうち、湾入口南岸と街の中に造られた二つの要塞跡が現在残っている。岩礁でできた城壁は厚さ 3m もあり、錆びた大砲が並んでいた。今日でも兵舎、武器格納庫や見張り小屋の跡が解った。スペインが国力をかけて築いたカリブ海側のポルトベロの要塞が海賊、ヘンリー モーガン^(*)によって壊滅的な打撃を受け、同じく中南米支配の拠点として栄えていた太平洋側のパナマビエホ、今日のパナマシティもまた 1671 年彼によって徹底的に略奪、破壊され、廃墟と化してしまった。彼はただの海賊ではなかった。体格と腕力に優れ、頭は切れ、勇気と気力に溢れ、決断力と確固たる意志をもち、その上極悪非道云々…まさに海賊の見本のようなという記述がある。(「カリブ 海 海賊ヘンリー モーガン」石島晴夫著 原書房)



海賊博物館の写真

スペインに遅れをとっていたイギリスが、ヘンリー モーガン始め、フランシス ドレイクなどの海賊に、公に援助をしてカリブ海域でスペイン領を攻撃し、スペインに向う宝船を襲わせ財宝を強奪させていた。彼らの海賊行為は、本国イギリスにとっては国益だったことは後に、ヘンリー モーガンがジャマイカ島代理総督など国家の要職にまで就任していることから理解できる。

コロンに引き返し、バスターミナルから 30 km 先のサン ロレンソにタクシーで向った。街を出て間もなく、パナマ運河のコロン側のガトゥンロックを渡った。道の両側は鬱蒼とした熱帯雨林で、時折り野生動物が飛び出してきた。検問所で車を止められた。この先がアメリカ軍の基地だという。兵舎が見えてきた。飛行場もあったが人影も飛行機も見えなかった。ドライバーによるとベトナム戦争時には、ここで熱帯雨林気候に体を慣らし、訓練を積んで出兵したというが、今は機能していなかった。途中サン ロレンソの看板があったが、道が枝分かれする度に不安になった。雨に加えて大木が光を遮り妙に暗い。道は未舗装のぬかるみと化し、車体は擦れるし、スリップし始める始末だ。ぽっかりと空の見えるところに車が 3、4 台止まれる広場があった。濡れた草を踏みしめ、霧雨のサン ロレンソ要塞に立った。白サギが群れるチャグレス川河口を見下ろせる岬の上だった。石垣、濠、弓形の兵舎も草木に覆われており、いかにも「兵どもの夢の跡」といった感じだった。

帰路も大変だった。雨でぬかるんだ道は、丸坊主に近いタイヤは無力だった。ドライバーは笑みを浮かべながらチップを弾んでくれという。コロンでサンロレンソ行きと聞いて、3 台のタクシーから乗車拒否にあった理由が飲み込めた。ドライバーが明るさ、ユーモアを絶やさず、ガイド役もこなしてくれたのが嬉しかった。

(*) 海賊ヘンリー モーガン 「海賊を裏切った海賊」という芳しくない異名を持つカリブ海最大のイギリスの海賊。海賊を止めた後、国家の要職に就き、海賊を取り締まる側になった

＜クナ族の住むサン ブラス諸島＞

サンブラス諸島への交通機関は、高翼、単発のセスナで、パイロット含めて 6 人乗りだった。突然、マムツボ島にふわりと着陸した。飛行場とはいっても、不十分な長さの舗装されたところとランディングギアの跡が残る草原の滑走路と、スコールしのぎの建物があるだけである。マムツボ島は飛行場専用で無人だった。

目指すドルフィン島は、飛行場の島からエンジン付ボートで 6～7 分だった。観光島といった感じで、宿泊棟が 8、食堂 1、外に 2 家族の住居のみだった。島は直径 30m ほどで、水面からせい

ぜい 1mにも満たない。周囲には広くサンゴ礁が発達しており、潮の干満が小さく、ハリケーンも来ないから水没の心配はないという。白いサンゴの砂に芝生が茂り、大きなヤシの木が木陰をつくっていた。1,900 人が生活する隣の島までは 70~80mほど離れていた。

朝食後、ハンモックにころがり本を開くと、貿易風になびくヤシの葉がすれる音だけが聞こえる。なんとも浮世離れしたところだった。昼さがり、対岸の島に渡った。路上のあっちこちに色鮮やかな刺繍が並べられていた。足を止めると何処からともなく売り手が現れる。クナ族に伝わる伝統手芸品、モウである。

男は西洋化した服装だが、女性は華やかだ。ブラウスを着て、色模様の綺麗な布を腰に巻きつけ、ふくらはぎはビーズ玉を糸で繋いだものを脚絆の様に巻いている。鼻には金の輪をはめ、金の腕輪をしており、かなりのおしゃれだ。このブラウスだが、40 cmに 25 cm位の本綿の生地を前後に縫い合せ、袖をつけものだが、前後の生地が芸術品なのである。赤や黒などの生地をベースにして、その裏にいろんな色の生地を縫い付け、挟みでベースの生地切れ目を入れる。内側に折って縫い込んでいくアップリケ刺繍で、下に隠れていた生地の色でいろんな模様にしたものである。一口に模様といっても、幾何学模様から語り継がれている物語や空想の動物、イヌやネコ、サルや鳥、カメや魚などなどあらゆるものが、細かい刺繍で一針一針縫い、極彩色に仕上がっている。手の込んだものは、5、6 色の生地を使用するので 1 枚の作品を仕上げるのに数ヶ月かかるという。この刺繍、伝統手芸を縫いこんだブラウスが「モウ」で、クナ族語のブラウスのことである。

島内は子どもで溢れていた。女性の多くはちくちくと両手を動かしモウを縫い、男たちは網を干していた。ネコの額ほどの畑はあったが、2,000 人近い人口を養うにはどう見ても少な過ぎる。それに島の何処にも墓が無い。この 2 点を尋ねたら、手っ取り早い現金収入はパナマシティへの出稼ぎであり、島々と本土、大陸に茂るヤシの木が経済基盤だという。墓は本土の奥深くだという。島あるいは大陸の海岸近くに埋葬すると、カニから食べられてしまうのだという。

2 日目の昼下がり、比較的大きなコロンビア船が入ってきた。石油製品やモウの材料となる生地、日用品を運んできたのだという。島には税関も無ければ、政府の役人も居ない。クナ族の大長老ネレ カントーレが、独立（1903 年）から 20 数年後にクナ族の自治権をパナマ政府から勝ち取っている。以来、何者からも干渉されずに島々と大陸の海岸沿いで自分たちの文化、風俗習慣を守り、受け継いで暮しているのだという。比較的大きな島にはコンGRESと呼ばれる大きな建物があった。長老を中心とした島民会議場である。パナマ政府は、クナ族が伝統的に持っている土地の支配権を認め、干渉しないのだという。



島滞在中に住民 1 人の島を含めて 7 つの島巡りとシュノーケリングで沈没船を見た。ロッジにあった地図を広げてみたが、それらの位置関係を把握することは出来なかった。島が小さすぎるのだ。ここで過ごした記憶の整理がつかず、現実と空想の世界が入り混じったような奇妙なひと時だった。そして、このような場所が現実が存在し、そこに身を置いたこと自体が不思議に思えてくる。



キューバ（キューバ共和国）

キューバの語源は、カリブ海大アンチル諸島最大の島で、先住民族の「中心地」を意味するクバカンに由来する。キューバは、スペイン語ではクーバに聞こえる。キューバ本島及び周辺の島々からなる社会主義共和国で、国の標語は「祖国か死か、我われは打ち勝つ！」と勇ましい。フロリダ半島の南に横たわる東西に延びる細長い島で、面積は、日本の本州の 1/2 程。美しい海や自然から「カリブ海の真珠」とよばれている。人口 1098 万人（2024）で、ヨーロッパ系とアフリカ系がそれぞれ 25%、混血が 50%で、世界で最も人種差別の無い国として知られ、スペイン コロニアル時代そのままの街が残っている。サトウキビ栽培中心の農業国だが、畜産業も盛んで穀類や豚肉の伝統料理が多い。なかでも米料理の「Congrí」は薄塩味、赤飯そっくりで日本人の口に合う。スペイン アンダルシアの米、南米原産の黒豆とアフリカで使用されていた香辛料の組合せで生まれたという。一膳飯屋で食べられる日常的な食べ物である。飲み物の代表はラム酒で、ヘミングウェイが愛したラムカクテルの「モヒート」が知られている。

<入国>

2003 年エルサルバドル、翌年はパナマから空路で入国した。パナマからの入国は、入国手続きから解放されるまで長時間を要した。入国審査はスムーズに過ぎたが、荷物が出てこない。40 分程待ってコンベアベルトがギーギーと軋みながらやっと動き出したが、肝心の荷物はぼつりぼつりであった。ベルトに載せる前に、どうも X 線検査をしているようだ。2 時間後に荷物を受取ったが、税関には長蛇の列ができていた。ごくごく一部の人がフリーパスを見て、つじつまの合わない理由を口にしながら試みたが列に戻された。列の人数が減るところか、別便の到着もありむせかえるよう

な体臭が充満しはじめ、汗が吹き出てきた。

係員の表情は石の彫刻のように無表情だ。並んでもう 1 時間近く過ぎた。自分の番まで 3 人目あたりから、荷物検査の様子が見えてきた。殺風景な室内に机が 3 脚、係員が 4 人、荷物を 1 つ 1 つ開き、隅々までチェックしていた。ちょっと目立った女性が厳しいチェックを受けていた。サンタクロースまがいの大きな袋 3 個から出されたものが机に並べられている。靴が 5～6 足、ジーンズ数本、ブラウスの類、色とりどりの下着が山となっていた。何か記された書類と共に別室へ消えていった。2 人の子供連れの女性は、ダンボール箱の子供たちの着替えまで 1 枚 1 枚数えられていた。やっと自分の番である。並んでから既に 2 時間近く経過していた。ザック 1 つだが、ボリビアとエクアドル、パナマを廻った 40 数日分の荷物である。中身を全部出した。撮影済みフィルム 1 本 1 本ケースから取り出し確認している。何事も無く終了したが、所要時間 30 分だった。

＜キューバの独立と革命 — カリブに浮かぶ赤い島＞

コロンブスによってヨーロッパに知られたキューバは、400 年もの間スペインの植民地支配下にあった。それを止めさせようと文学者のホセ マルティが独立軍を率いて、1895 年に始まった宗主国スペインからの独立戦争は、社会的に虐げられた環境に置かれていた黒人たちを含めた民衆の戦いであった。キューバ国内に利権を持つアメリカが参戦して勝利を収め、1902 年にアメリカの保護国として独立した。

キューバで最も尊敬されているのが、独立の英雄ホセ マルティである。彼の思想はキューバ人の道徳観に大きな影響を及ぼしているというから、国民の絶対的な支持を得ている。彼の著書を読んだフィデル カストロは、キューバ革命へのビジョンを育んだとされている。しかし、彼の歩んだ道は、16 歳で政治犯として収監、スペインに国外追放され、人生の大半を国外で送っている。合衆国でキューバ革命党を結成し独立運動を組織化し、第 2 次独立戦争の指令を出し、マキシモ ゴメスと共に戦闘に参加し、42 歳で戦死している。

ハバナ新市街中心部に人影はまばらな革命広場がある。天空に伸びる星型の記念碑を背に純白のホセ マルティ^(*)が跪いていた像があった。広場も、記念碑も、彼の像も、とにかく大きい。大きいというだけで人々の心を惹き付ける大きな要素の一つだが、彼ほど国民的支持を得ていても心理的要素を加味する必要があるのだろうか。それとも外国人向けの宣伝か、社会主義特有の手段かと考え込んでしまった。

独立後、アメリカに操られたかいらい政権、バティスタ政権が続いた。カストロは、1953 年に 150 名の同士と政権を倒すため蜂起するが失敗に終わる。カストロは捕らえられ、裁判にかけられる。被告人フィデル カストロの弁護人が、フィデル カストロ本



ホセ マルティ像



人であった。そして、「首謀者は誰か」の問いに「私たちの独立の使徒であるホセ マルティ」と答えている。また、裁判時の自己弁護で自分の行動を正当化し、キューバのあるべき姿を4時間のスピーチをおこない、「歴史が私に無罪を宣告するであろう」と述べている。後に、ネルソン マンディラによる「アパルトヘイトへの抗議」、マハトマ ガンジーの「イギリスによるインド植民地支配の不当性の訴え」と共に世界の三大自己弁護として語り継がれている。

その後、恩赦で釈放され、メキシコに渡った。ここで革命家のチェ ゲバラと出会う。彼ら2人を中心に1959年にキューバ革命が起こし、その後、直ぐに社会主義を目指す政権が誕生した。アメリカ系資産の国有化、農地改革、教育制度の改革、医療制度の充実、人種や女性差別の一掃など矢継ぎ早に実行した。1961年、アメリカはキューバとの国交を断絶し、その後50年以上も経済制裁のため、キューバへの援助や輸出を禁止する。そのため、アメリカ人は、マイアミからキューバの首都ハバナまで飛行機で1時間もかからないキューバに行くこともできなかった。

(*) ホセ マルティ (1853-1895)

キューバ建国の英雄で、キューバの使徒として国民から敬愛されている。作家、独立運動家、革命家で、現代キューバを語るうえで重要な人物。15歳でスペインからの独立戦争（第一次）に関わり国外追放。1892年キューバ革命党を結成。1895年第二次独立戦争で凶弾に倒れ、独立を前に亡くなった

<フィデル カストロ>

キューバ建国に関った多くの人々の銅像を街中で目にしてきたが、フィデル カストロの像は1度も見ることはなかった。ヘミングウェイ関連場所を巡るときにお世話になったタクシードライバーに、彼の像を見たい旨伝え、と、「まだない。亡くなったらそっちこっちに建てられるだろうから、そのときにまた来い」とのことだった。

キューバ滞在中、彼が話題になることは少なかった。ドライバーや市民の話では、「彼の子どもたちでさえ、特に贅沢品は持っていない」、「彼の家で最も贅沢なものは大型テレビ」などなど、とにかく独裁者にありがちなマイナスイメージが不思議なほどなかった。また、「複数の女性との間に8人くらいの子どもがいる」など、庶民受けする一面も語ってくれた。



<世界で一番かっこいい男>

ジョン レノンに「世界で一番かっこいい男」といわしめたキューバの革命家チェ ゲバラ。キューバの永遠の英雄として、今も国民に愛され続けている。首都ハバナの革命広場前にはゲバラの肖像が描かれた内務省があり、街を歩けばいくつもの壁画や看板を目にする。アルゼンチン人である彼が、なぜここまでキューバ国民に親しまれ人気があるのだろうか。南米大陸を北に向って旅していたチェ ゲバラが、革命家フィデル カストロとメキシコで出会った。徹底した平等主義で意気投

合し、カストロと共にキューバ革命でリーダー的な存在として活躍する。

当時のキューバはアメリカの支配を強く受け、マフィアの巣窟になっていた。1959年のキューバ革命によりアメリカ政府との外交関係を断絶し、現在の社会主義国家が誕生した。革命家チェ・ゲバラの人気の理由は、容姿のカッコよさはもちろんのこと、理想を求めて生き、徹底した自己犠牲を貫いたことだ。「貧困や不平等に苦しむ人々を救いたい!」という強い思いで、革命家として情熱的に突き進んだ人生は、まさに男の中の男であり、女性以上に男性が憧れる、カリスマ的存在なのである。

キューバ革命の伝説的英雄、チェ・ゲバラは革命政権が成立した直後の1959/7に来日し、広島を訪れている。当時の池田勇人通産相と会見した後、予定になかった広島訪問を強く希望したといわれている。1泊して慰霊碑に献花、資料館や原爆病院を訪れた。「君たちはアメリカにこんな酷い目に遭わされて、怒らないのか」と言い残した。また、彼の足取りを追って長女のアレイダゲバラさんも2008年来日し、広島で講演した。



【資料】 ゲバラ名言と広島

- * 世界のどこかで誰かが被っている不正を、心の底から深く悲しむ事の出来る人間になりなさい。それこそが革命家としての、一番美しい資質なのだから。
- * 人間はダイヤモンドだ。ダイヤモンドを磨くことができるのはダイヤモンドしかない。人間を磨くにも人間とコミュニケーションをとるしかないんだ。
- * 酒は飲まない。タバコを吸う。女を好きにならない位なら、男を辞める。

<ソ連崩壊と市民生活>

革命後、キューバは社会主義国になった。お金持ちも貧しい人もおらず、全員平等という考え方だ。カストロは、国民が教育や医療も無料で受けられるよう改革を進めた。その結果、人口当たりの医師の数は日本の3倍、才能があれば芸術やスポーツ、バレエの英才教育も受けられる。

主要農産物である砂糖を、通常の相場よりも高くソ連に買い上げてもらい、さらに、石油を安い価格で売ってもらっていた。しかし、1990年代に、ソ連が崩壊した。一気に輸出の70%がなくなったという。

キューバでは生活必需品が配給によって国民に行き渡る。日本と同じように良く食べられる米と砂糖の配給量は充分だが、肉類や魚の配給量不足は深刻だという。状況により変動するが、牛肉は年に数回、鶏肉は月に1~2回、3人家族で一羽、卵は週に3~5個だという。日本に住む私たちの暮らしからは想像もできない食糧事情だが、人々は明るく友好的だ。食糧難でも他のラテンアメリカの都市で見られるようなスラムや物乞いは見られない。

社会主義を貫いたキューバには、新しいものが入ってこなかったもので、古いものが残った。1940年~1950年式のフォードやビュックなどのアメリカ車が現役で走っている。植民地時代のスベ

インの建物も見応え充分である。さらに、スペインとアフリカからの黒人奴隷が運んできたアフリカの音楽が混ざって生まれたキューバ音楽、サルサは国の宝になっている。キューバ人は誰でもが一流のダンサーで、街中に音楽が流れ出すと、座っている人が立ち上がって踊りだすのは日常的な光景であった。

<特別期間>

キューバは、1492年、コロンブスがこの地に立ったとき、キューバの美しさに驚きの声をあげたところとされている。その後、スペインの植民地、独立後はアメリカによる事実上の支配、20世紀半ば革命による社会主義国家となり、長い間ミステリアスな国としてベールに閉ざされてきた。キューバが定めている祝日は、1/1 スペインによる植民地、その後アメリカ傀儡政権による新植民地からの真の独立を祝う「革命勝利（解放）記念日」、5/1 メーデー、7/25～27 は、1953年カストロの率いる青年革命軍部隊がサンティアゴ デ クーバのモンカダ兵営を襲撃し、民族解放への道を示した「革命記念日」、10/10 1868年スペイン統治からの「独立戦争開始記念日」と12/25 クリスマスの5つである。他に歴史的出来事を記念する14の公式記念日がある。

祝日を見る限り、国の歴史は革命の連続で、なんとも勇ましい国家に思えてくる。これに加えて、50年近くもの長い間アメリカと対等の立場、言い換えればキューバの自主性を貫き、時には一触即発の状態にもなった珍しい国である。面積は勿論、政治経済においても世界の大国と島国の小兵が、フロリダ海峡を挟んで睨みあってきた。

キューバの歴史館ともいべき建物が「革命博物館」である。1920年から40年間大統領官邸として使用されていただけに、白大理石の堂々とした建物だった。3階は1959年のキューバ革命前、2階は1954年社会主義キューバ、そして1階は冷戦終結後の「特別期間」、チェ・ゲバラと旧大統領官邸の歴史を展示説明していた。また、別棟にはフィデル・カストロやチェ・ゲバラなどの革命戦士がメキシコからキューバに上陸する時に使ったヨット「グラマン号」が展示されていた。

ところで、「特別期間」(period especial)とは、冷戦終結でソ連と東欧諸国との貿易と援助停止による経済的苦境を意味する。1991年のソ連崩壊によりキューバは、市場の80%を失い経済が逼迫し、社会主義体制は窮地に陥った。1993年度の経済成長率は前年度比-34.8%で、摂取カロリーは、1989年度の65%にまで低下している。この打開策が食糧増産、医療技術向上、観光業振興の3点だった。

しかし、世界最大の観光客を誇るアメリカ人を締め出している。アメリカ系のクレジットカードは使用できなかった。アメリカは勿論、アメリカ経由で乗り入れる航空路もなかった。ちなみに、国別観光客はカナダを筆頭に、イタリア、ドイツ、スペイン、フランスの順である。

<街角風景から>

○ 大学構内

バナ大学に向かった。昨年、門が締まった校内入ろうとしたら警官に止められたところである。学生が行き交う広い石段を上りはじめた時、一人の学生から声をかけられた。法学部で学ぶカロールだと自己紹介があった。彼の案内でキャンパスを歩き、図書館、グラウンド、植物園を通り抜け、医学部の前に出た。図書館は殆どのイスが埋まり、書庫で本を探す人、出入口前のおしゃべり集団

で混みあっていた。グラウンドで汗を流す姿から世界に冠たるスポーツ大国を想像したが、世界で活躍する選手たちは大学の施設で育つのではなく、政府のよるスポーツ専門学校による英才教育だという。

○横断歩道とヒッチハイク

キューバに横断歩道はなかったような気がする。勿論、歩行者専用信号機も記憶にない。カピトリオ前のプラント通りやホテル近くのマレコン通りと



いった交通量の多い大通りを横断する時のことは鮮明に思いだせる。まず、左から来る車に注意し中央分離帯に進み、右から来る車に注意して渡る。その時、車の流れに向かって進むのが鉄則である。

キューバの車社会で驚かされたものにヒッチハイクがある。タクシーでヘミングウェイ所縁のコヒマル、旧自宅の博物館と海水浴で郊外に出た時である。道路の交差点やバス停などで、車道に一步踏み出して車待ちしている姿を見かけた。特に、若い女性が目だった。信号待ちしていると、絶妙なタイミングで交渉が始まる。言葉の壁で聞き取れなかったが、双方とも慣れたものであった。海水浴帰り、真っ赤なビキニ姿でバスタオルを肩にかけて乗り込んできたときは少なからず驚いた。

ソ連崩壊に端を発した経済困窮で燃料不足を引きおこし、交通機関が麻痺状態に陥ったという。この状況を克服するために考え出された苦肉の策が「ヒッチハイク奨励政策」で、今日まで続いているのだという。ヒッチハイクが凶悪犯罪の温床いうことで禁止、あるいは罰則まで設けている国まであるのに比べると、キューバの安全、治安の良さの裏返しともいえる。また、ラテン気質、開放的なカリブ海の熱帯気候、社会主義の相互扶助などなども作用しているのかもしれない。

○ 電力不足

1 泊朝食付 40\$のコリーナホテルに引っ越して来た。22:00 時を少し迴っていたが、外気はむっとする熱気を帯びていた。チェックインの時、エアコンは23:00 時過ぎ頃まで作動しないことを告げられた。理由は電力不足だという。そう言えば、1 年前と比べてホテル内の照明も明らかに落ちていた。空港での荷物の異様なまでのチェック、1/3 近いホテルのクローズそして電力不足など キューバの経済状況は困窮しきっている。しかし、人々の表情は、以前と変わりなく陽気で、明るくホスピタリティーに富んでいた。そして街の何処からともなくテンポの速い音楽が流れ、体が動きだすラテン気質は少しも失っていなかった。

○ 子どもたち

サンタクララの白と薄い青を基調にしたコロニアルスタイルの建物が美しいところでバスを降りた。レストラン、日用雑貨、靴、衣服の店が軒を連ねていた。人混みの中を10分ほど歩くと、市庁舎、学校、劇場、小奇麗な店に囲まれた公園だった。一角に花屋さんが



あり、白ブラウスにカーキ色スカート姿の中学生と思しき子供たちが買い求めていた。花束、一輪の赤い花を手にした子供たちは、話し声、笑い声を振りまき楽しそうだった。カメラを向けるとわるびれずに微笑み、たちまち人垣ができてしまった。底抜けに明るく、素朴で、開放的な子供たちの笑顔と声が、革命、闘争、追放、処刑などなど心に重くのしかかっていたものをいっぺんに払拭してくれた。

○ 今後が気になる

2015 年、突然、歴史が動き出した。「キューバと仲良くしないのは時代遅れだ」などのアメリカ国内の声に押されて、オバマ大統領が「本日、アメリカはキューバとの関係を変える。この半世紀余りで最も重要な政策転換を行い、時代遅れの手法を終わらせる」と述べ、54 年ぶりに国交回復を実現した。

アメリカの経済制裁によって、キューバは経済的に困窮しながらも幾度も荒波を乗り越えてきた。その間、キューバはグローバル化の影響をあまり受けることなく、自国の文化を守り、育んできた。「カリブ海の真珠」の異名を持つ美しい手つかずの海や自然、スペインによる植民地時代そのままの街が残る魅力的な国であるが、大勢のアメリカ人観光客押し寄せることが容易に考えられる。物価の上昇は必至であり、時の流れと共に古き良きキューバは急速に薄れていくのだろうか。

世界で最も人種差別のない国、サルサなど音楽が日常生活に溶け込んだ陽気な国民性、日本の赤飯そっくりの「Congrí」を常食とし、日本ひいきのキューバの今後の変貌が気になる。



<ビーチにて>

カリブ海に浮かぶ亜熱帯の島キューバ、観光の目玉は何と言ってもビーチである。前回はヘミングウェイマリーナ先の田舎のビーチで半日過ごした。中央アメリカの旅で出発点となったカンクンの雰囲気を出すと、キューバ最大であるバラデロは躊躇してしまった。アメリカの億万長者による開発の歴史に加えて、近年の開発は無秩序に進んでいることで知られるとなれば、尻込みせざるを得なかった。ホテルのツアーデスクに行ったら、即バラデロの紹介があった。もっと田舎で、経済的な所をお願いすると、サンタマリアビーチを選んでくれた。バス賃3\$、1泊3食付きで40\$だった。

翌日、ホテル前でバスを待っていると、10分遅れで乗客3名を乗せてやってきた。プンタ要塞の海底トンネルを抜けてひたすら走り、ホテル近くで下ろしてくれた。3階建ての大きなホテルで、フロント前のロビーは広く気持ち良かった。3階の部屋からはヤシの木越しにビーチが望め、白い砂浜にヤシの葉パラソルが並んでいた。多くのグループはビーチに楽器を持ち込んでいた。人の集まるところには音楽が付きものである。キューバはリズムの宝庫である。勿論、歌ってお金を稼いでいるプロもいた。キューバはリズムの宝庫である。

<乗りもの>

旧国会議事堂、カピトリオ前は乗り物展示場の感があった。最も目を引いたのは、でか



くごつい 1950 年代のアメリカ車であった。日本ならとっくの昔にクラシックカーの仲間入りだが、キューバの顔というべき存在であった。ヘミングウェイの足跡を辿るときに利用したタクシーが 45 年前のフォードで、最も一般的な車であった。サイドミラーはなく、いくつかのメーター類は作動しなかった。ドライバーが取り付けたオーディオ機器と車体と不釣り合いの小さな扇風機が微笑ましかった。

モーロ要塞の帰りに乗ったフォードは、フロントガラスの下に誇らしげに「FORD 1908」と書いてあった。ボンネットは先細りの四角形で、ぴっかぴかだった。屋根は幌で、ドアは無かった。運転席は背もたれ、薄いクッション付きのベンチだった。そして、熱帯のよどんだ熱気を切り裂き気持ち良く走った。しかし、エンジンの音からして 100 年前の車とは到底思えなかった。皆が解かりきっている嘘は、むしろ微笑ましかった。



馬鹿でかいアメリカ車とは対照的に、黄色いココナツ型のココタクシーも珍しかった。原付エンジンの三輪車で、2 人乗りだった。1999 年から観光客向けに登場したと聞いた。近距離移動時に好んで利用したが、人混みを縫って、路面の凹凸に飛び跳ね、急ハンドルでの走行には閉口した。ガソリンスタンドは 24 時間営業で、見る限りではガソリン不足ということはなさそうだった。いろんな車に混じって自転車を改造したビシタクシーや馬車も現役で客待ちしていた。新車では、韓国、フランスと日本が目立った。そんな中で、ホテルナショナルデ クーバで客待ちしているタクシーは、全て黒塗りのベンツだった。市内 3\$ の料金が、どれ位に跳ね上がるのだろうか。



これらの車群とは別に、大通りのバス停に中央部が落ち込んだお化けのような車両が止まっていた。大型トレーラー型で、日本人の感覚からすると 3 台のバスを繋ぎ合わせたような乗り物で、いつも混みあっていた。停車、発車する時は巨体をうねらせていた。一見、双コブラクダに似ているところから「カメージョ」、ラクダと呼ばれ、定員が 100 名を優に

超すと聞いた。



<コングリ>

キューバは独立後、良し悪しは別にしてアメリカとの結びつきが強かったにもかかわらず、主食は米の国である。キューバの食文化は、先住民が食べていたものに、大航海時代以来到来したスペイン人をはじめとするヨーロッパからの移民が持ち込んだもの、それに奴隷として連れてこられたアフリカ人が持ち込んだ食材、調理法がミックスしているといわれている。

国内何処でも食べられるのが米料理のコングリ、「豆の炊き込みご飯」である。米はスペインアンダルシア米、豆は南米原産の黒豆、時にはアカインゲン豆とアフリカで使用されていた香辛料の組み合わせで生まれたという。現地の食材と海外から持ち込まれた食材が混じり合って生まれた料理を「クレオール」と呼んでいるが、その典型的な料理である。

米は細長くばさばさしたものの、これに茹でた豆、タマネギ、ピーマンやパプリカの微塵切りや豚肉の細切りなどを加え、豆の茹で汁で炊く。香辛料は胡椒とニンニク、オレガノやクミンなども加わる。味付けは塩で、エスニックな香りがする。見た目は赤飯と似ており、薄塩味で日本人の口に合う。



<ハバナに残るアメリカ>

市街地図を求めて街に出た。アイボリーホワイトのスーツをばりっと着込み、葉巻をくわえた男と目が合うと、“オウラ！”の挨拶が飛んできた。目的を告げると、任せておけと先に立って歩き始め、2つの航空会社をたずねた後に向かったのはハバナ最高級ホテル、ホテル ナショナル デ クーバだった。

マレンコ通りの小高い丘に聳え 1930 年に建てられた歴史あるホテル



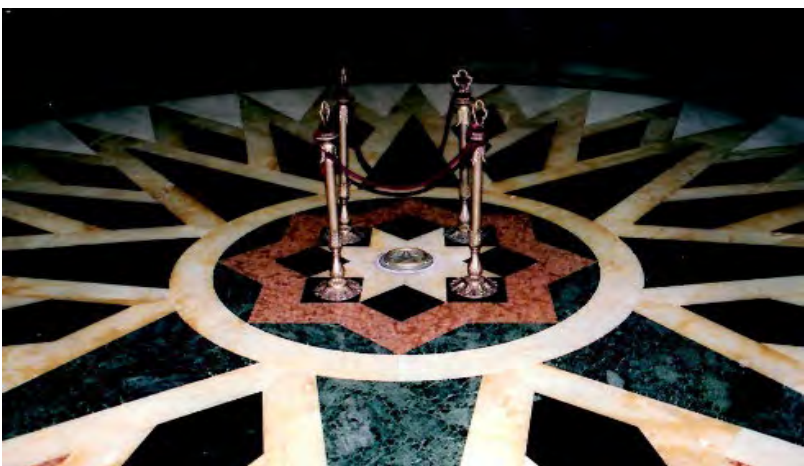
だ。年期の入った高級感漂うロビーの売店でツーリスト マップ「ハバナ」を買い求めた。ホテル中庭は、高台のため海岸との間のマレンコ通りは見え、足元の緑滴る芝生の先は明るいブルーのカリブ海へと続いていた。思わずため息が漏れた。紺碧の空のもと芝生は光り輝き、ヤシ葉が海風に揺れている。街の喧騒と騒音から隔絶した広大な庭園で直ぐに地図を広げるのは野暮過ぎるところだった。ぼーとした長い時間の後で、おもむろに地図を開き早々に行き先を決めた。そして、ここにいる限り、自分の求めてきたキューバとは無縁の場所であることを知り腰を上げた。

ランパ通りから海辺のマレンコ通りに出た後、アルマス広場に向かった。きらぎらの太陽を覆い隠す緑が生い茂り、子どもたちの声に混じって鳥のさえずりも聞こえてくる。広場東側には、5ツ星ながら威圧感のない色彩のこじんまりしたホテル サンタ イザベラ、18 世紀後半の建物そのままという。反対側には大きな白い柱とアーチ型入り口の市立博物館で、歴代総督府の置かれていたバロック様式の建物があった。そして背伸びするとヘミングウェイが「誰がために鐘は鳴る」(For Whom the Bell Tolls) を書き上げた赤っぽい建物のホテル アンボス ムンドスが見えた。

オビスポ通りを西に 10 ブロックほど歩いた。道路の石畳は所々剥がれ、狭い歩道は建築物の修復、改造工事現場になっていた。ここハバナ旧市街、アバナ ビエハは 1986 年にユネスコの世界遺産に登録されている。バルコニーがアクセントの建物の彼方に尖塔が現れ、崩れかけた建物が並び街路を古いアメリカ車が走り、街歩きそのものが楽しい。初めての街は歩くに限る。

中央公園からブラド通りに出た途端、これまでの人々を包みこんでいた街並みは一転した。大きなドームと人々を威圧する建造物があった。写真で見るアメリカ合衆国の国会議事堂そっくりだ。革命前の 1959 年までの 30 数年間、キューバ議会が開かれていたというカピトリオだった。それにしても何故合衆国のシンボルの建造物を真似る必要があったのだろうか。内部はさまざまな色彩の大理石が用いられ、さしずめ大理石博物館の感があった。スタッフの女性によると、全ての石材はイタリアから運んだものだという。

道路を挟んで南側に、フラテルニダー公園があった。コンクリートや石のジャングルとは対照的で芝生と樹木が生い茂り、人々を包みこむ優しさがあった。カピトリオのように観光客が主役ではなく、遊び回る子どもたちの舞台でもあった。かつて、南北アメリカ



中心部の床は大理石のモザイク模様

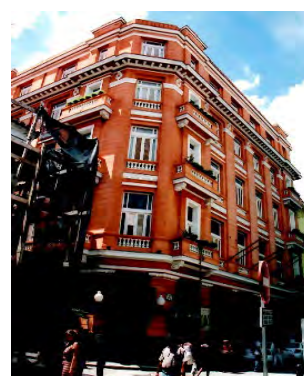
大陸諸国の連帯と平和などの促進を目指したパン アメリカ会議が1889 年以来開かれていた。40 年ハバナで開催された記念に造られた公園で、鉄柵に囲まれた樹木は加盟各国の土を混ぜ合わせ土壤に植えられたものだを知った。合衆国主導で始まった会議は同国の利益追求の場となり第2 次世界大戦頃に崩壊している。

アメリカ主催会議記念の公園、合衆国の国会議事堂をまねた建造物、ハバナを象徴するかのように走る大型のフォード、そして幅を利かせる US ドルなどなどからすると、この国の徹底した反アメリカが霞んでしまう。



＜キューバとアーネスト ヘミングウェイ（1899～1961）＞

キューバを愛し、「誰がために鐘は鳴る」(For Whom the Bell Tolls) や「老人と海」(The Old Man and the Sea) など数々の名作がこの地で生まれた。彼の住宅は、旧市街地から車で15 分、閑静な住宅地の丘の上にあった。鬱蒼と茂るココナッツやマンゴーの木々とハイビスカスやブーゲンビリアなど色とりどりの花々に囲まれた白亜の殿堂であった。現在は「ヘミングウェイ博物館」となっており、「老人と海」を書いた部屋が当時のまま保存されていた。ハバナ市内に定宿としていたホテル アンボス ムンドスがる。ここの511 号室で、「誰がために鐘が鳴る」を書き上げた。現在はミニ博物館になっていた。



ホテル アンボス ムンドス

「老人と海」の舞台となったのは、ハバナ市街から東へ15 分ほど行った小さな漁村コヒマルである。タクシードライバーは、コヒマルの雰囲気が好きだというなり、大きく深呼吸していた。2 人で歩いている時だった。背後に何かを感じて振り返ると車がいた。いつの間にか道路の中央部を歩いていた。コヒマルは車の方が止まってくれるのどこかさが残るところだった。

ヘミングウェイが好んで利用したレストラン、ラテラサは周囲の建物に比べると少し垢抜けしていたが、ペンキが剥げつつある建物だった。しかし、一步入った内部は別世界だった。

落ち着いた色彩は時の流れを醸し出し、歴史の重さを漂わせていた。そして、飾られたヘミングウェイの写真の数々は、彼とコヒマルの関係を如実に物語っていた。「老人と海」の「老人」のモデルはここに住むグレゴリオ氏だったことが知られており、自宅も残っていた。この小説の発表が1952 年だから、独立とは名ばかりでアメリカによる新植民地状態であった。作品に出てくるカジキマグロと老人との凄まじい闘いを、漁師の本能に似た執念として漠然と捉えていた。しかし、時代背景を思うと、老人の両肩に漁業仲間の生活もが重くのしかかっていた様に思えてきた。



「老人と海」のサンチャゴとマノーリン少年

レストランのすぐ先に公園があり、地元民がくつろいでいた。海に向かってヘミングウェイの小

さな胸像が建っていた。地元の漁師たちが提供した船の部品で作られたものだった。

<ヘミングウェイのハンテングとペット>

彼の自宅は旧市街から車で 15 分、閑静な住宅地で鬱蒼と木立の茂る丘の上に建つ白亜の殿堂であった。観光客用の駐車場から自宅へ向う途中にゲストハウスがあり、その一角が事務所となっていた。1939 年から 1960 年まで、妻、子ども 2 人とイヌ 4 匹、ネコ 16 匹と暮していたところである。

大理石の石段を数段上がり、木立に隠れた木造白塗りの家があった。内部には入れないが、窓から眺められるようになっていた。邸宅の一



隅に背の高い石造りの建物があった。母屋が蔵書等で狭くなって、ここに避難しながら執筆したという。また、部屋の白壁には彼自身がアフリカで仕留めた大型動物の頭の剥製がずらりと飾られ、蔵書が各部屋は勿論のこと、バスルームまで埋め尽くしていた。ベッドルームには、立ったまま使用したといわれるタイプライターがあり、ダイニングルームには特注のテーブルとイスそしておびただしい数の食器類が整然と並んでいた。居間にあった油絵の自画像は大きな黒ネコと一緒にあった。自宅背後の竹林が切れたところにスイミングプールがあり、愛犬の名を刻んだ墓碑が 4 つ建っていた。家族の 5 倍ものペットと暮す動物好きが、何故ハンテングを趣味としていたのだろうか。しかも、ペットと剥製の同居は理解の域を越えていた。勿論、ペットと野生動物は別だ。でも、やっぱりどうしての疑問は解けなかった。悶々としていた時、ふと頭に浮かんだのが「彼はアメリカ人」だった。アメリカ人特有の合理主義がなせる業かと思った途端、縫れ合っていた糸がほどける思いがした。

二階に望遠鏡が据えられていた。スタッフの話によると、彼は時々望遠鏡でハバナの街を眺めていたという。屋上に特別に登らせてもらった。周囲の木立を見下ろせる高さで、ハバナの主だった建築物を肉眼でも識別できた。一般の住民から隔離されたような、高台に建つ贅を尽くした豪邸生活だからこそ、ひなびた漁港、コヒマルに通い詰めたのは解からないでもなかった。でも、高台の一角から望遠鏡で喧騒に満ちたハバナの街を眺めて何に思いを馳せていたのか気になった。

<キューバの飛行機は定刻には飛べない?!>

ハバナリブレのツアーデスクでサンティアゴをはじめ個性的なローカル都市への希望を述べると、明日、往復飛行機で 1 泊 2 日のサンティアゴ ツアーがあるという。少し迷ったが、膨らんだザックを背負ってのバス移動を思うと易きに流された。

翌朝、7:00 時だというのに空港のチェックインカウンターはすべて閉まっており閑散としていた。カウンター職員が現れ始めたのが 8:50 時を過ぎていた。チケットを示し、自分のカウンターを尋ねたが、解らないの返事。そして、ここで待ての一点張り。出発の 9:00 時が迫っているだけ

に気が気でない。スタッフ達は朝挨拶代わりのおしゃべりで忙しい。その輪が次第に大きくなっていく。ゆっくりした南国ペース、ラテン的なおおらかさ、競争にさらされない社会主義的要素などが重なり合った結果の現象だろうか。万事がスローペースで、各自の仕事範囲が極端に狭い。出発時刻になってやっとチェックインカウンターが開いた。

搭乗カウンターで厳しい手荷物検査、ゲートを通ると99%以上の確率でブザーがなりボディーチェックである。当然、全員が通過するまで長時間の待ち時間である。そして、搭乗の段になって、航空機前での手荷物検査は微に入り細わたるものだった。

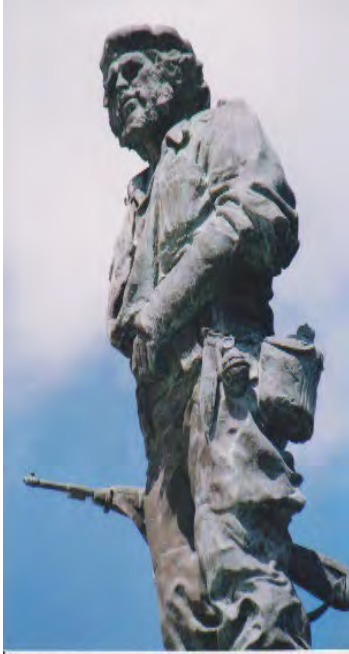
厳しいチェックは、溢れる経済的困窮者によるテロや亡命防止対策の一環だという。キューバにとって亡命は珍しい現象ではない。カストロ政権が始ってから95万人以上が母国を去ったという。今日でも年間数1,000人がフロリダ海峡を越えようとしていると聞く。それなのにキューバ発の航空機乗っ取りは未だないというから、テロというより亡命、乗っ取り防止の措置なのだろう。出発は3時間遅れだった。いづれにしてもキューバでの飛行機の乗り降りは大変なエネルギーを消耗する。

＜ゲバラシティ＞ サンタ クララ

幹線道路から逸れて間もなく空の広々とした革命広場に、カリビアンブルーの空と流れる積雲を背景にしてゲバラの巨象が屹立していた。ベレー帽、戦闘服姿で左手にライフル銃を持ち、左腕は手首まで包帯を巻いていた。鋭い眼光の先は、革命の根拠地となったシエラマエストラ山脈、その遙か彼方が故郷アルゼンチンだという。左手の包帯は戦闘中に塀を飛び越える時、転倒による骨折だという。ゲリラの長としては様にならない話したが、親しみやすい人間性の現れだろうか。像の右側に石碑があり、カストロに宛てた訣別の手紙だった。

「わたくしは、世界のあちこちから、ささやかな力を貸してくれるようにと誘われている。キューバに対する責任のために、君には禁じられていることが、わたくしにはできる。別れの時がやってきたのだ。わたくしは党指導部における職務、大臣の地位、少佐の位、キューバ人としての身分を正式に放棄する。わたくしは子どもや妻に物質的なものを、何も残してゆかないが、それは苦にならない。むしろそのほうがうれしい。かれらの生活と教育には、国家が十分なものを与えてくれるだろうから。もし、他国の空の下で最期がきたら、わたしはこの人民と、とくに君を思い出すだろう。」





サンタ クララ市街地に入っすぐ、線路脇に 5~6 両の貨車がばらばらに置いてあるところでバスが止まった。ゲバラが指揮した革命軍が勝利を確実なものにしたサンタ クララの闘いの現場、「装甲列車襲撃記念碑」だった。武器弾薬を満載し、政府軍兵士を乗せた装甲列車がくることを知った革命軍が、線路の一部を外して脱線転覆させ、手作りの火炎瓶などで襲撃した。たった 18 人で、約 400 人の政府軍を数時間で投降させ、革命軍は 1 人の犠牲者も出さなかった現場である。

この闘いの数日後にバティスタ大統領がドミニカ逃亡によって革命が成功する。この時のゲバラは 30 歳、カストロとの出会いが 27 歳、グランマ号でキューバに来たのが 28 歳だった。キューバの使途ホセ マルティはじめ、フィデル カストロもチェ ゲバラもみんな若い。この年代で腐敗と圧制の権力に対して、自由、平等を旗印に、思想を練り、行動を起こしそして実現したことは感慨深い。同時に、若さが持つエネルギーの底知れぬ力がキューバ革命の特徴なのだろう。

＜200 年間タイムスリップできる街＞ — トリニダー

トリニダーへのバスが最初に立寄ったのがマナカ イスナガの塔であった。18 世紀に建てられたものだという。トリニダー郊外に広がるロス インヘニオス盆地は、かつて砂糖産業の栄えたところで、多くの黒人奴隷が 17 世紀から 19 世紀後半まで働いていた。その数は、最盛期には 12,000 人を超え、人口の半分近くを占めていたという。

てっぺんに登る木製の階段は傷み、ゆがんでおり一歩ごとに軋んだ。44mの最上階からは、周囲の緑の山々と緑濃いサトウキビ畑が望まれ、なかなかの展望であった。しかし、本来の目的は、奴隷労働者監視用だった。ひっきりなしに観光バスが入ってくる。近くにレストラン、売店もあり、露店のキューバ刺繍を中心とするお土産物屋が並んでいた。

緑が少なくなり、赤茶けたレンガ屋根とパステルカラーの壁、そして波打つ漬物石を並べたような石畳の街がトリニダーだった。バスは市立博物館前で止まり、ガイドの案内で博物館に入った。アフリカでの奴隷狩り、輸送コースと運搬船の様子、値踏みそして労働様子など、奴隷の歴史と展示物が目を引き付けた。先ほどのマナカ イスカの塔が、奴隷の逃亡、暴動の場合は鐘を打ち鳴らすためのものだったというから、今日では考えもつかない苛酷なものだったことが容易に想像された。街の中心はマヨール広場で、ヤシの木が茂る可愛い所だ。周辺は教会や砂糖で財を成し世界から逸品を集め、革命時に逃亡した家財をそのまま公開しているロマンティコ博物館、少しはな



れて高い塔が際立って見えるバロック様式の闘争博物館など、いくつもの歴史的建造物が建っていた。しかし、歴史の奥深さを感じ取れるのは、断片的な建物ではなく街全体の建物が、さらに石畳を行き交う馬車も、停車中のクラシックカーも、さらに人々が集い、語り合う様子までも含めて何の違和感もなく融け合っていることである。



奴隷博物館の絵画

トリニダーは、1510 年代サンティアゴ デ クーバを建設したディエゴ ペラスケスによって築かれた。黒人奴隷の労働に支えられ、栄えた砂糖の街であった。しかし、19 世紀後半になると、独立戦争や奴隷制度の廃止などにより、引き潮の如く衰退し、街並みだけがそのまま残ったという。サトウキビ畑の広がるロス インヘニオス盆地と併せて世界遺産に登録されている。200 年前の古都とはいっても、日本の奈良や京都のように壮大な建築物はない。一般市民の普通の家屋と石畳の道路で展開されている日常生活が醸し出す匂いが残る静かな街並みであった。



道路中央部が排水路のスペイン風街路

＜キューバ第2の都市、サンティアゴ デ クーバ＞

昼食後、キューバ独立戦争の時、スペイン軍が最後まで抵抗した古戦場経由でサンタ イフィゲニア墓地に向った。市街地の喧騒は突然消え失せ、馬車が行きかい、アスファルトジャングルとは縁遠い緑に覆われた田園風景に変わった。そして、草むら越しに薄汚れたコンクリート剥き出しで小さな窓が目立つ、南国に相応しくないアパート群が現れた。旧ソ連の援助で建設されたという説明だが、陽気な国民性を閉じ込める代物に思えた。

ぱっと視界が開けたところがパテオン、墓地であった。墓は大きさもデザインも様々だが、国旗が翻っているところはモンカダ襲撃で亡くなった革命軍メンバーの墓だという。突然、タップダンスをスローテンポにしたような音色が響いてきた。キューバ独立の父ホセ マルティの墓に立つ衛兵

3人が交代するところだった。白手袋の右手には、短剣付の銃を持ち、左手を大きく振り、足を大きく上げてロボットのように行進していた。

市街地に戻りカルテル モンカダ、モンカダ兵営へと向った。サンティアゴの街は、曲がりくねった坂道を登りきるとその先が石段だったり坂道だったり起伏に富んでいる。坂道は子供たちの恰好の遊び場で、手製のキックボードで遊んでいた。

モンカダ兵営跡近づくと、子供たちの澄んだ声が聞こえてきた。かつて銃声が響き、今も弾丸の跡が残る黄色い外壁に囲まれた敷地、革命の発祥の地は小学校と革命博物館に姿を変えていた。1953/7/26の明け方、政府軍の武器や弾薬を狙い135人で襲撃したところである。リーダーのフィデル カストロは若干27歳だった。当していた。1952年アメリカの後ろ盾を得たバティスタが軍事クーデターによって権力を掌握すると、ゲリラ戦で政権打倒を目指し、ホセ マルティ生誕100周年に当たる年に行動を起こした。結果は失



遊びの数だけヒーローがいる



敗に終り、多くの仲間を失い、彼自身逮捕された。傾きかけた陽光を背に受けたモンカダ兵営を後にするとき、世界で唯一の被爆国ながらも「核拡散防止条約」に署名できない国で育つ子どもたちと、独裁と腐敗を一掃しようと決起した大小無数の痕跡を日々眺めながら過ごす子供たちにどんな違いが出るのか気になった。街の中心地であるセスペデス広場で車を降り、広場に面して建つカサグランダのカフェでしばらく頭を冷やしてからホテルに帰った。

<キューバ シガー工場と販売所>

ビニャレスツアーバスのメンバーは30名だった。キューバ西端の州がピナル デル リオで、タバコと米の産地で知られる農業州である。ハバナから190 km、赤い大地が時折り見え隠れするが、深々と緑に被われた丘陵のなかを走った。のんびりした田園風景は街に入って一転し、しっかりと落ち着いたコロニアル様式の建物が並んでいた。革命前の大富豪の屋敷を思わす建物がタバコ工場、フランシスコ ドナティエンだった。どういう訳かカメラ、手荷物の持ち込みは厳禁だった。

音楽の流れる仕事場は、使い古した作業台に向って1列4人が向い合い8人1ブロックに分かれ、各人各様の服装で100人ほど働いていた。葉巻の構造ごとに分かれた作業で、区切りの良い所で各自が小休憩をとり、何となくのんびりした雰囲気だった。

世界に誇るキューバのタバコ工場は手作業だった。道具といえば、磨り減ったまな板のような作業台、葉脈を切り取る半円形の山刀、ハベッタ、芯端を切りそろえるギロチンカッターと外側に巻



良質なタバコの産地で知られるピニャーレス

く葉を糊付けする糊くらいだ。切り取った葉脈をもらい鼻に近づけてみた。頭がくらくらするほどの香りだった。良質のタバコの葉は風の当たらない窪地で、牛の排泄物を肥料にしているという。日本で栽培され、乾燥中のタバコの葉よりも深い茶色で、香りは数段きつかった。

ヘミングウェイ博物館の帰り、パルタガス葉巻販売所に立寄った。カピトリオと中華街の間で、薄汚れた

建物が建ち並ぶ一角だった。大きく重

そうな木製の扉を境にして内側は別世界で、汚れ、塵っぽさとは無縁でスポットライトを浴びているほど明るかった。並んだ製品の葉巻は、一本から、ボックス、ケースにいたるまで金色に輝いていた。飛び交うお金は100ドル紙幣だった。室内に充満する豊穡な香りは、「禁断の木の実」に思えた。到底手の出る代物でなかった。そして、キューバの街に漂う匂いが葉巻であることを知った。

葉巻大国ながら、街で見かける喫煙者の姿は意外と少なかった。アジアやヨーロッパの方が多い印象さえ受けた。キューバは、国民の90%以上に持ち家を与え、教育、医療は無料福祉策を取っている社会主義国である。そして、基本的な食料や日用品は支給されるが、その中に誕生年度によってタバコも含まれているという。

街のいたる所で、多くの人々から声をかけられた。そのなかで、キューバ特産のシガー、葉巻売りが群を抜いて多かった。カピトリオでは若い女性の3人組、カテドラル裏手海岸通りのフリーマーケット周囲は一匹狼の男、夕涼みで賑うマレコン通りに立つ露店の兄さん、アルマス広場ではおばさんと、ところ構わずであった。最初から買う気がなかったのに値段を聞いていないが、売り手が多いということは、かなり甘い商売なのだろう。

<世界遺産のモーロ要塞>

タクシーでモーロ要塞に向った。サンティアゴは、内陸に深く入り込んだ湾の奥に立地している。世界遺産の砦、モペドロ デ ラ ロカ要塞であるが、現地ではモーロであった。同じ呼び名の要塞がハバナにもあるが、モーロ (Morro) とはスペイン語で波止場の先端のことで、岬の突端に造ったものは全てモーロと呼ばれていたらしい。ハバ



ナのもーロ要塞同様スペイン統治時代イギリス政府後押しの海賊に備えたものだった。海に向って台地が落ち込むところに造られているので、海面から67mの高さの見事な石垣であった。ハバナの四角で一枚床のモーロ要塞と違って、城壁の曲線、床の屈曲、高低差など複雑な構造になっていた。

カリブ海に反射する陽光を遮断した階下は薄暗かったが、大柄な黒人女性が弾薬庫と砲弾を運び上げる斜面、収監所など奥の奥まで案内してくれた。収監所の一部は海賊博物館となっており、眼光鋭いヘンリー モーガンはじめ多くの海賊の似顔絵が掲示されていたが、パナマのポルトベロ要塞で見たものと同じだった。

＜カサ パルティクラール（民宿）とパラダール（民営食堂）＞

ハバナツアー窓口でホテルの紹介をお願いした時は、既に夜の帳が降りていた。昨年利用したホテルサン ジョンはクローズだという。最も安いところで朝食付 40 ドル。パナマシティで宿泊していたところは 15 ドル、ボリビア ラパスでは朝食付 16 ドルだった。泊れないことはないが踏ん切りがつかねていると、カサ パルティクラール（民宿）の素泊り 20 ドルはどうだという。空港のハバナツアーに勤務する女性の家にお世話なることにした。彼女の勤務時間終了する 20:00 時を待って、ねぐらへと急いだ。

アパートは二階建てで居間、台所、バスルームと寝室が 2 つであった。旦那さんは病気で他界、長女は結婚しスペインに渡り、19 歳の息子と 2 人暮らしだという。エアコン付の息子の部屋を空けてくれた。彼は階下に住む祖母のアパートに移動したという。薄汚れた外観とは裏腹に室内は小奇麗だった。決して広くはないが 2 人暮らしには十分なスペースだ。家具や調理用具の類はつまつまと収まっていた。冷蔵庫の使用は自由にと、アパートと部屋の鍵を渡され家族の一員として迎えてくれた。

夕方、コンクリートの防波堤に両手を支えに飛び上がり腰をおろした時、スニーカー姿の女性と視線が合った。年の頃 24、5 歳だろうか。マニ、ピーナッツを食べながら暫らく話し込んだ。レストランを尋ねると、隣のおっさん紹介のところに案内するという。マレコン通りを横断し、ガソリンスタンドの背後から小路を 3 度程曲がったところだった。何の看板もなかったが、扉を開くとテーブル 3 脚並んでいた。そして、これがプライベートレストランの「パラダール」であることを知った。社会主義国家である以上基本的には国営企業以外の営業は認められないが、特別税を支払って許可される民営食堂である。

チキンをお願いしたら、コングリ、トストーンとサラダが乗った大皿が出てきた。コングリとは、キューバというよりはセントラルアメリカを代表する米料理である。インデカ米と豆と一緒に炊き込んだもので、一見「赤飯」に似ており、飯粒がばらばらしているのが原則だと聞いた。豆の香ばしさとほどよく効いた塩味が食欲をそそった。チキンの肉汁を混ぜながら食べる味は美味そのものだった。トストーンもコングリ同様、幅広く食べられているバナナ料理である。未熟なバナナを輪切りにし油で揚げ、粗熱を取ってから潰して二度揚げしてこんがりとし色づいたものに塩を振りかけたものだ。ぱくぱく食べている時だった。彼女、アイマラがチキンに手をつけていないのに気づいた。近頃元気のない母親に食べさせたいと持ち帰った。パラダールは何処となくほのぼのとした雰囲気があり気に入った。でも、旅人が 1 人で見つけるのは不可能に近い。

＜変わりつつあるキューバ＞

ソ連崩壊後、カストロ議長が宣言した経済的緊張事態を意味する「特別期間」は解除されておらず、アメリカの経済封鎖も続いている。極端な物不足に対して、キューバ政府は、砂糖とタバコの輸出に加え観光に力を注いでいる。

2009年、日本との外交関係樹立80周年を迎えた。2010年にはキューバ政府は市場経済活性化のため、革命以来の自営規制を緩和した。その結果、個人事業主が増えレストラン、民宿、土産物屋が爆発的に増加し、市場競争が始まっている。同時に車や不動産販売も自由化された。そして、2014年、カストロ国家評議会議長とオバマアメリカ大統領が会談し、翌2015年に54年ぶりに国交を回復し、経済制裁が緩和された。ところが、トランプ政権になって2017年と2019年の2度にわたって経済制裁を再強化されてしまった。表向きの理由はキューバ現政権への締め付けだが、本当のところはアメリカを敵対視するベネズエラへの支援に対する懲戒と言われている。

＜キューバ出国＞

キューバは、欧米の国々とは違うし、アジアとも異なる。革命を経た社会主義国であって、独自の方法で、独自の社会を目指している。独自となれば、よそ者にはなかなか理解しがたいが、十分な時間的余裕をもち、キューバ特有の時間の流れに合わせると、キューバ理解に役立つ気がする。

キューバの入国と出国は、済んでしまうまでは何が起こるか解らない。予定もたたない。でも、キューバ国内の旅は、南国的なペース、ラテン的な陽気さとルーズさ、溢れるホスピタリティーで、文句無に愉快で楽しい。従って、出入国はパラダイスへの出入口、儀式に思えなくもない。2回目の旅は、バスで田舎を廻ることを目標に入国したが、ハバナを起点にしたツアーになってしまった。易きに流されてしまったが結構楽しめた。

再々訪となれば、田舎の街に滞在し、キューバ特有のスコール後の空の青、赤と輝く緑の大地の中に身を置き、西側諸国のフィルターを外して革命に関わる人々に思いを巡らしてみたい。無性にまた行きたくなる不思議の魅力を持つキューバである。